

富山県高岡市

美野下遺跡調査概報

— 高岡古府宿舎建設に伴う調査 —

1986年3月

高岡市教育委員会

序

越中国府所在地として、高岡市伏木は富山県内においても格別の歴史的意味を有する土地であります。

このたび、高岡市伏木古府宇美野下地内において、大蔵省北陸財務局の高岡古府宿舍建設事業に伴い、本市では当地が古代から近世に至る貴重な埋蔵文化財の包蔵地であることを鑑み、昭和60年9月から同年12にかけて、一部緊急発掘調査を実施致しました。

美野下地内は、北接する古国府藤原寺境内とその付近が国府跡地と推定され、宇御亭角地内と共に、御亭角遺跡として国分寺創建に先立つ時代の氏寺ないし国府関連寺院跡と推定され歴史家の注目を集めている所であります。

同地域では、これまで地元住民や二、三の郷土史家の表面採集によって白鳳時代と奈良時代の瓦が発見されており、更に昭和41年の富山県教育委員会の発掘調査によって、瓦の出土を見、中世の城郭遺構が発見されましたが、国府または御亭角庵寺に直結する遺構が発見されるに至りませんでした。

今回の調査では、出土遺物の大半が7世紀後葉から10世紀頃のものであり、多くの上飾器・須恵器に混じって、白鳳・奈良時代の瓦、円面・風字瓦、墨書き器、県下で4例目の綠釉陶器、中國産白磁等、国府・官衙遺跡を特徴づける資料が多々発見されましたことは、誠に大きな収穫がありました。

終わりに、本調査を実施するに当たって多大なるご理解とご援助を賜りました大蔵省北陸財務局、富山県埋蔵文化財センター、そして関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和61年3月31日

高岡市教育委員会
教育長 竹下 外男

例 言

1. 本書は、大蔵省北陸財務局による高岡古府宿舎建設に伴う、美野下還跡の調査の概要報告書である。
2. 本調査は、北陸財務局の委託を受けて、高岡市教育委員会が実施した。調査費用は、北陸財務局が全額負担した。
3. 調査地区は、富山県高岡市伏木古府 2 丁目67番に所在する。調査期間は、昭和60年10月5日から同年12月3日までである。
4. 本調査は、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井重洋氏の指導を受け、高岡市教育委員会社会教育課文化係主事大野文郷、同嘱託山口辰一が担当した。発掘調査に当たっては、地元の皆さんとの参加と社会教育課職員の協力を得た。整理・報告書作成に当たっては、山崎美保子、船木悦子、永沢山紀乃をはじめ、富山大学生・高岡竜谷高校生等の参加を得た。なお、市立児童文化センター（館長吉野正次）の施設を利用させていただいた。
5. 調査事務局は、高岡市教育委員会社会教育課に置き、課員の協力を得て文化系長太田健一が調査事務を担当し、社会教育課長島富士弥が總括した。
6. 現地調査及び報告書作成に当たって、以下に記す各氏、各機関から、御教示を賜わった。（敬称略・五十音順）
秋山進午、宇野隆夫、岸本雅敏、京田良志、塚原二郎、西井龍義、舟崎久雄、古岡英明、前川要、前田英雄
富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室
7. 本書の執筆は、酒井氏に「調査に至る経緯」の項を分担していただき、その他は山口が担当した。

富山県高岡市美野下遺跡調査概報

目 次

序・例言・目次

I 遺跡概観.....	1
II 調査経過	5
1. 調査に至る経緯.....	5
2. 発掘調査の経過.....	5
III 調査概況.....	7
IV 遺構	8
1. 土坑.....	8
2. 清.....	8
3. 埋没谷.....	13
V 遺物	14
1. 土器.....	14
2. 瓦.....	18
3. 土製品.....	19
4. その他の遺物.....	19
VI 結語	20

挿 図 目 次

第1図 遺跡地図 (1/25,000)	2	第5図 遺構図[1] (1/200)	10
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)	3	第6図 遺構図[2] (1/200)	11
第3図 調査風景.....	6	第7図 S X 1 縦断面図 (1/60).....	12
第4図 調査地区全体図 (1/400)	9	第8図 S X 1 横断面図 (1/60).....	12

図面目次

図面1	遺物実測図（土器）	土師器	図面10	遺物実測図（土器）	須恵器模拓影
図面2	遺物実測図（土器）	土師器	図面11	遺物実測図（土器）	綠釉陶器・白磁
図面3	遺物実測図（土器）	須恵器	図面12	遺物実測図（土器）	古式土師器・中世陶器他
図面4	遺物実測図（土器）	須恵器	図面13	遺物実測図（瓦）	御亭角系瓦
図面5	遺物実測図（土器）	須恵器	図面14	遺物実測図（瓦）	御亭角系瓦
図面6	遺物実測図（土器）	須恵器	図面15	遺物実測図（瓦）	国分寺系瓦
図面7	遺物実測図（土器）	須恵器	図面16	遺物実測図（瓦）	国分寺系瓦
図面8	遺物実測図（土器）	須恵器	図面17	遺物実測図（瓦他）	軒平瓦・土鍋・獸脚
図面9	遺物実測図（土器）	須恵器・灰釉陶器	図面18	遺物実測図（土製品）	陶鏡

図版目次

図版1	遺構	1. 距跡全景（東） 2. 調査地区全景（南）	2. 緑釉陶器箱
図版2	遺構	1. 調査地区全景（東） 2. 調査地区全景（南東）	3. 灰釉陶器・内尚
図版3	遺構	1. 調査地区全景（東） 2. 調査地区全景（西）	4. 灰釉陶器・外尚
図版4	遺構	1. SD1近景（西） 2. SD2近景（西）	図版12 遺物（土器） 1. 緑釉陶器・内面
図版5	遺構	1. SD3近景（南） 2. SX1近景（東）	2. 緑釉陶器・外面
図版6	遺構	1. SX1縦断面（1）（北） 2. SX1縦断面（2）（北）	図版13 遺物（土器） 1. 白磁
図版7	遺構	1. SX1縦断面（3）（北） 2. SX1横断面（西）	2. 越前
図版8	遺物（土器）	土師器	図版14 遺物（土器） 1. 軒平瓦
図版9	遺物（土器）	須恵器	2. 丸瓦・凸面
図版10	遺物（土器）	須恵器	3. 丸瓦・凹面
図版11	遺物（土器）	1. 灰釉陶器狀	図版15 遺物（土器） 1. 御亭角系平瓦・凹面
			2. 御亭角系平瓦・凸面
			図版16 遺物（土器） 1. 国分寺系平瓦・凹面
			2. 国分寺系平瓦・凸面
			図版17 遺物（土製品他） 1. 土鍋
			2. 獣脚
			3. 繩の羽口
			図版18 遺物（土製品） 陶鏡

I 遺跡概観

美野下遺跡を喰せる伏木台地は、二上丘陵の東麓、小矢部川の河口左岸に発達した河岸段丘である。伏木台地（第1図でスクリーントーンを貼った部分）は、上位と下位の2つの段丘で構成され、その範囲は南北約2.1km、東西約1.2kmを計る。西側には二上山の丘陵山地が急崖となつて迫り、北東側には海岸平野が、東側には沖積平野が段丘崖を隔て展開している。北西側は加古川によって、南側は矢田の浸食谷によって区画されている。下位の段丘が大部分を占め、この段丘は標高14~16mぐらいで、3つの主要な舌状台地より成り立っている。すなわち、2条の侵食谷が東南東から西北西へ向って入り込むことによって、北部台地、中部台地、南部台地と3区区分されるに至っている。

当遺跡は、中部台地の南東隅部分に位置する（第1図のA、以下記号・数字は第1図を示す）。西側には、白鳳時代造営の寺院跡、御亭角庵寺の存在が指摘されている御亭角遺跡（B）が位置している。北側は浄土真宗本願寺派の大寺院勝興寺（C）の境内に統一している。勝興寺は、戰国時代の城郭寺院であるとともに、約200m四方を計る境内は、越中国府・国衙の有力な推定地とされている。付近には国守館推定地も所在する。国府と密接な関連を有する越中國分寺は、国府推定地の北西600mぐらいの北部台地上に位置していたとされている。現在、この地に薬師堂が存在し、この付近が国分寺跡（9）として県指定史跡となっている。延喜式内社で、一之宮の一つである氣多神社（7）は、國分寺の北東方、國府推定地から1.1kmを計る上位の段丘上に位置している。

伏木台地も含め二上丘陵の山麓には多くの遺跡が存在している。これらは先土器時代に始まり、近世・近代へと続くものであり、二上丘陵周辺が連続として人々の活動の舞台となっていたことを如実に示している。奈良時代以降、國府・國分寺が営まれ、古代越中における政治・文化の中心地として栄えた当地は、これに先立って多くの古墳が造営されたことでも注目される。國府・國分寺設置の前提となる社会的基盤を探る意味においても、これらの古墳の発明は重要なことと言わねばならない。

当遺跡の北東3.3km、二上丘陵の北麓太田の地に桜谷古墳群（1）が営まれている。総計13基の古墳が確認されている。前方後円墳は1・2号墳の2基で、国指定史跡となっている。1号墳は全長62mを計る前方後円墳で、2号墳は全長50mを計る帆立貝式の前方後円墳で、石釧等の遺物が出土している。他の11基は円墳で、7号墳からは金銅製の方形鎧帶金具が出土している。付近より内行花文鏡や管玉等も出土している。当桜谷古墳群は、古墳時代前期末から中期初頭の1・2号墳をはじめ、中・後期の円墳に至るまで、長期間にわたり営まれた古墳群である。桜谷古墳群の南南東0.9kmには岩崎古墳群（3）が、1.8kmには国分山古墳群（5）が営まれている。これらは二上丘陵が海に臨み急崖となっている直上に立地している。国分山古墳群はA~H墳の

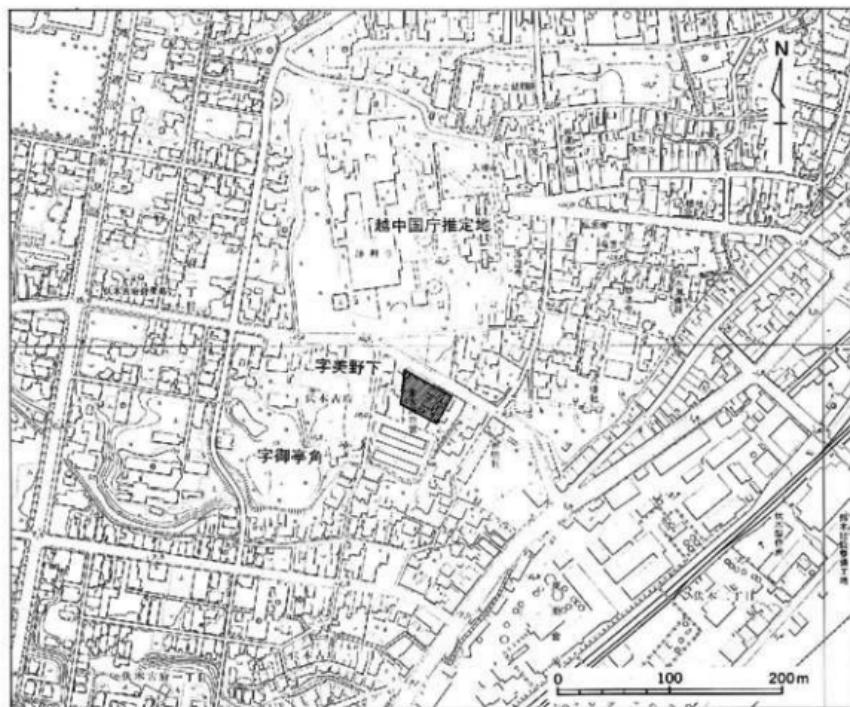


第1図 遺跡地図 (1/25,000)

8基で構成されている。この内、最大のA墳からは、県下でも例が少ない漢式鏡が出土している。獸形鏡と內行花文鏡である。

桜台古墳群・岩崎古墳群・国分山古墳群が二上丘陵の北麓から北東麓にかけて所在するのに対し、同じく南東麓から南麓にかけてもいくつかの古墳群の形成が見られる。伏木台地の南部台地上には、古府古墳・首冢古墳・千人塚古墳・矢田塚古墳からなる串岡台地古墳群ないし古府古墳群と呼称されている古墳群(11)が位置し、矢田の浸食谷を隔てた段丘上、矢田と城光寺との間に矢田上野古墳群(13)が対峙している。さらに西方には、城光寺古墳群・院内古墳群等多くの古墳群の形成を見るのである。上記の内、矢田上野古墳群は方墳1基、円墳10基で構成され、この内1基からは、鉄地金銅張りの杏葉・雲珠等の馬具が出土している。

伏木台地には、古式土師器や須恵器等も多く散布しており、既述の周囲の古墳群と相俟って、



第2図 調査地区位置図(1/5,000)

当地付近に古墳時代における有力な勢力の存在を想定できる。古墳時代以前の遺跡については具体的に述べてこなかったが、縄文時代等の遺跡もあり、以下に第1回で示した遺跡の名称と時代をまとめて挙げておく。

2—岩崎御庭先遺跡、先土器・縄文前期

4—岩崎遺跡、先土器

6—岩崎鼻遺跡、縄文

8—一ノ宮（大北）遺跡、縄文・土師

12—古府遺跡、須恵

14—高美町遺跡、縄文・土師

15—城光寺上野遺跡、縄文

16—城光寺表上野遺跡、縄文・土師

17—下牧野遺跡、土師

伏木台地は周囲に数多くの後期古墳群を形成しつつ、古墳時代の終末期を迎える。この時期の遺跡として近年とりわけ注目を集めているものとして、先にも触れた御亭角廃寺が中部台地南寄りに所在している。この廃寺は7世紀中葉まで遡る北陸最古の寺院跡とされ、古岡英明氏による一連の研究成果がある。国分寺造営當に先行する段階、國府成立期ないし直前に寺院が造営された点は、律令国家形成期における当地の歴史的重要性を十分に物語っている。その後、中部台地を中心に國府が、北部台地を中心に國分寺が造営された。これは当地が古代越中の中心地として律令国家と地域社会との結節点として機能し、その重要性をさらに増加させたことを示している。万葉の歌人大伴家持が越中國司として赴任し、約5年間当國府で執務したことは広く世に知れわたっている。一方考古資料の面においても、古岡氏の研究に加えて、西井龍義氏が瓦を中心に研究を進められ、実相が判明しつつある。奈良時代の瓦が伏木台地に広く散布している状況が再確認されるとともに、御亭角廃寺の瓦の主要生産地として、同じ古代射水郡に属する小杉丸山遺跡の存在の指摘等、研究の進歩をみている。

平安時代以降、国衙権力・機能が変貌し、中世社会が展開していく中にあって、小矢部川河口の港津の臨む土地である点に変わりではなく、対岸の放生津には守護所の設置が見られる。なお、鎌倉時代の白山経塚（10）が伏木台地に所在する。その後、戦国時代に至れば、勝興寺及びその付近が城郭として機能し、その溝堀は現在もその跡を止めているのである。

II 調査経過

1. 調査に至る経緯

昭和60年8月中旬に、高岡市伏木古府地内で、大蔵省北陸財務局が進めていた高岡古府宿舎建設工事中に大量の土器等が発見され、隣接の御亭角遺跡の拡大が確認された。通報を受けた市・県教育委員会はただちに北陸財務局管財部宿舎課を始めとする工事関係者へ作業の一時中断を申し入れるとともに、遺跡の取り扱いについて3者による協議を実施することとした。昭和60年8月23日のことである。

協議は、8月28日に行われ、遺跡の範囲・内容を確認するための試掘調査を早急に実施し、今後の工事計画との調整を図ることとした。

試掘調査は、9月1日から5日まで実施し、下記の成果を得た。

1. 時代 古墳時代から中世まで断続的に営まれ、古墳～平安時代を主体とする。
2. 遺跡 越中国府、国分寺、御亭角遺跡（小杉丸山遺跡生産の瓦の供給地として近年注目されている）を始めとする遺跡群に近く、出土遺物等から国府に関係すると考えられる。
3. 範囲 工事予定地内ほぼ全域に広がると考えられ、工事予定地の中央部にみられる谷内に厚く（3～5m）大量の遺物が包蔵している。

以上のこととを基に、調査対応、期間、経費、工事計画との調整などについての協議を重ね10月初旬より建物建設予定地及び付属施設等により破壊される部分について記録保存を前提とした発掘調査を実施することとした。

2. 発掘調査の経過

試掘調査により、調査対象地域全体にわたり、奈良・平安時代を中心とする遺物包含層が存在していると認識された。よって、調査は先ず重機を用いて上層を除去し、遺物包含層を露呈することに努めた。上層から包含層へコンクリートが大きくくい込んでいたが、包含層をいたずらに掘削することを恐れて、重機による掘出は徹底にならざるを得なかった。

この上層としたところは現代の整地層である。全体に鉛洋を敷きつめて整地されている状態が確認されるとともに、建物の基礎部分が重複してそのまま残されていた。手作業による調査に移っても、コンクリートや排水管の摘除に労力の大部分を割かざるを得なかった。このような搅乱の存在が試掘調査段階で想定したより予想外に多く、調査の進行を阻んだ。

包含層を掘り下げつつ、搅乱の摘出に全力を注いだ。このような経過の中で、調査地区の北側



第3図 調査風景

で、東西約15m、深さ約1.5mの規模を示し、敷地外へも拡がっている掘削坑の存在を確認した。これは形状等より、近世末以降における瓦粘土採掘坑であると判断された。包含層としてきた土層は、この瓦粘土採掘坑の埋土上を被って存在しており、また包含層に近代の遺物も若干含まれていることが確認されつつあったので、遺物包含層としてきたものが純粋な奈良・平安時代の土層ではなく、近代に盛られた土層であると確信するに至った。

近代の盛土層を除去し、地山上面で遺構の検出に努めた。溝等の造構を検出したので、覆土を掘り下げ作業等を行いつつ、重点を次第に埋没谷の調査へ移していく。

埋没谷は、東側部分が工事のため大きく掘削を受けて欠落しており、南側部分も大部分が調査対象地域外であったので、先端に当たる北・西側部分の掘り下げが中心となった。縦断セクションを1箇所、横断セクションを2箇所設定して土層の把握に努めた。

11月上旬ごろに至って、図面作成や写真撮影を中心とした作業を行い、工事再着工のため、建物本体部分・付属施設部分を明け渡した。11月中旬から12月初旬にかけては、埋没谷の範囲や堆積状態を確認するため、工事対象外の地点にトレンチを設けた。特に南側に設けたトレンチは、出土遺物が最も多い地点でもあり、埋没谷の内容を把握するため重要なものであったが、諸般の事情により、不十分な調査で終わらざるを得なかった（このトレンチは、第3図参照）。

調査期間は約2箇月間存在したが、例年になく雨が多い年でもあり、実働日数は期間の割りには多いものではなかった。また戦後何度か建て替えられた建物の基礎が埋れてそのまま残されており、これらの抽出に相当量の人数・時間を削かざるを得ず、その分本来の調査が手薄すにならざるを得なかった。

III 調査概況

美野下遺跡は伏木台地の内、中部台地の南東部分に位置する。今回の調査地区は当遺跡の東端部、台地の末端部分に当たる。眼下には小矢部川が流れ、庄川の河口越しに古くは奈興の浦と呼ばれた放生津浦に至る。北方には日本海が、東方には立山連峰の姿を臨む景勝地である。

調査地区の大部分を埋没谷が占めている。台地の縁辺であることと加えて谷が入り込むことによって、元来平坦面の少ない土地であったことが察える。このためもあり明治から昭和（戦前）時代にかけて、大規模な盛り土・整地作業が行われ、当地を平坦地に造成したことが、発掘調査の結果判断された。この作業は付近の奈良・平安時代の遺物包含層を利用して行われたため、2次堆積の盛り土層を当初1次的な遺物包含層と誤認したと考えられる。

調査地区にはこの近代の盛り土層が20~50cmぐらい堆積し、谷に当たる部分や崖線に近い部分にはさらにも厚く存在していた。埋没谷以外の基本層位は、黄褐色粘質土の基盤層の上に、この盛り土層が載る形となっている。さらにその上に現代（戦後）の整地作業が行われており、全面に鉛錆が敷きつめてあった。そして、近世末以降の粘土採掘坑、戦前の軍隊のタコツボ、戦後における事務所や住宅建築に伴う、コンクリートや排水管の埋設等、純粹な造構検出面は限られたものであった。

調査対象地は、建物本体部分・付属施設部分に埋没谷調査のためのトレンチが加わり、変則的な形態となった。調査面積は707m²を計る。

調査のためのグリッド設定については、磁北方向に南北軸を取り、1辺3mの区画を一つのグリッドとし南西隅に起点を確めた。各グリッドは座標（東西軸=X、南北軸=Y）で示し、南西隅の数値がそのグリッドを表わすものとした。

検出された遺構は、土坑2基（SK1・2）、溝3条（SD1~3）、埋没谷1条（SX1）である。土坑は奈良・平安時代に遡る可能性がある。溝では、SD1が戦国から桃山時代のものである。SD2は一応、奈良・平安時代のものとしておく。SD3は桃山時代以降に下ることはないであろう。埋没谷は、平安時代ごろまでにある程度埋没したが、完全に埋没したのは近代の整地作業の結果である。

遺物は奈良・平安時代のものがほとんどを占める。一部が溝より出土している以外、2次堆積のものであるので、特に必要なもの以外、出土地点については述べないことにする。

IV 遺構

1. 土坑

S K 1

埋没谷 S X 1 の東端部 (10, 11) で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長軸 120cm, 短軸 100cm, 深さ 20cm を計る。ただし、上部は、工事のため削平を受けて存在しなく、土坑の最下部のみの検出に終ったため、本来はもっと大規模な土坑であったと思われる。遺物は出土しなかった。

S K 2

埋没谷 S X 1 の縦断面に接して (10, 8・9) で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長軸 180cm, 短軸 130cm, 深さ 90cm を計る。工事のため削平を受けていたことと、湧水のために内容を正確に把握するに至らなかった。南西側が調査地区外となり、S X 1 の縦断面がこの土坑を切断する形となつたため、S X 1 の縦断面が土坑のセクション帶の役目も果たした。このセクション (第 7 図) の観察の結果、S X 1 の第 7 層上面より掘り込んで土坑が構築されていることが窺われた。遺物は出土しなかった。

2. 溝

S D 1 (図版 4-1)

東西に走る溝である。横断面は U 字形を呈する。規模は幅 60~110, 深さ 10~40cm を計り、23m にわたって検出された。近代の粘土採掘坑や擾乱により分断されている。溝の西側において、埋没谷 S X 1 の最先端部をかすめ、S D 3 と一部重複する。S D 3 との新旧は、擾乱が存在するため不明である。遺物としては、溝の西側 (5, 15) で出土した越前の播鉢 602 (図版 12, 図版 13-2), 土鍤 801 (図版 17, 図版 17-1) がある。これ以外は土師器・須恵器の小破片である。

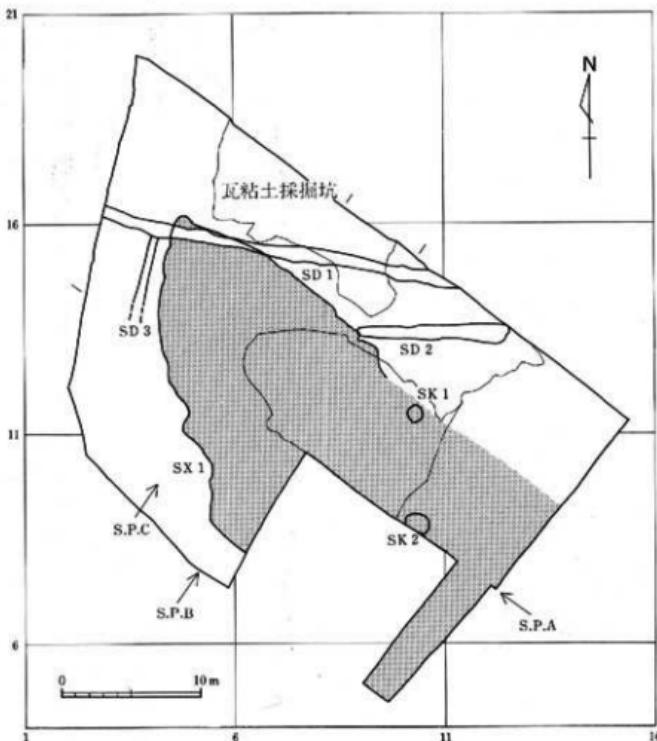
S D 2 (図版 4-2)

東西に走る溝である。横断面は U 字形を呈する。規模は幅 60~140, 深さ 10~40cm を計り、11m にわたって検出された。擾乱により削平を受け分断されている。溝の中央東寄りにある大きな擾乱を境として、西側と東側との 2 つの溝が存在し、また、東端部は溝の終りを示すような形状を示している。しかし、本来の溝の形態は上面削平が行われているので不明である。現況よりの一つの可能性として、溝下部が、鎖状に掘り深められている溝としての形態を指摘できる。遺物としては、溝の中央 (10, 13) で出土した、須恵器杯 205・206 (図版 3, 図版 9) と須恵器壺 242

(図面5)が挙げられる。これ以外は土師器・須恵器の小破片である。

SD 3 (図版5-1)

南北に走る溝である。横断面はU字形を呈する。規模は幅60~80、深さ10~30cmを計り、5mにわたって検出された。搅乱に大きく掘り込まれている。溝の南側(3, 11~13)付近において、図示していないが当溝の痕跡が確認されているので、本来、南側へ続くものであったと判断される。北側は、SD 1と接する付近まで確認できた。上記のとおりSD 1との新旧は不明である。遺物は土師器・須恵器の細片が少量のみである。



第4図 調査地区全体図(1/400)

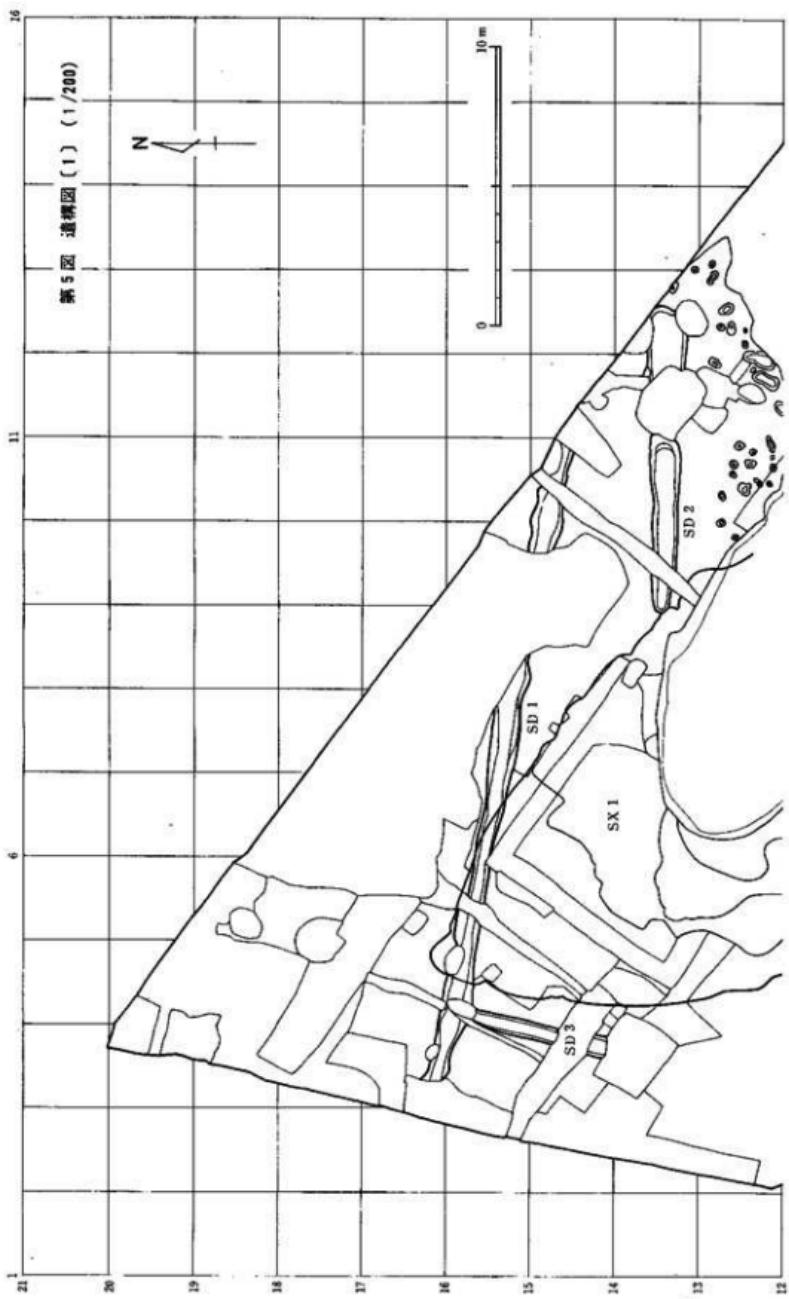
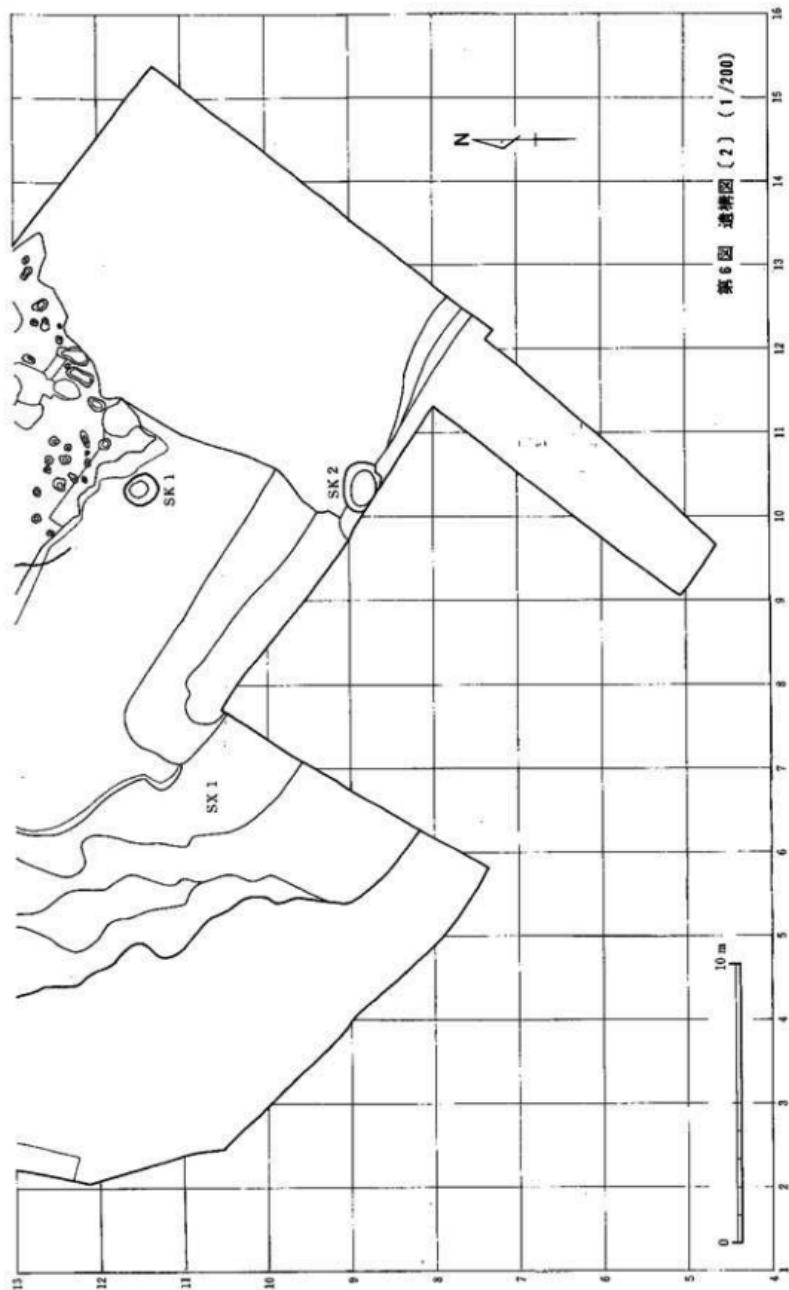
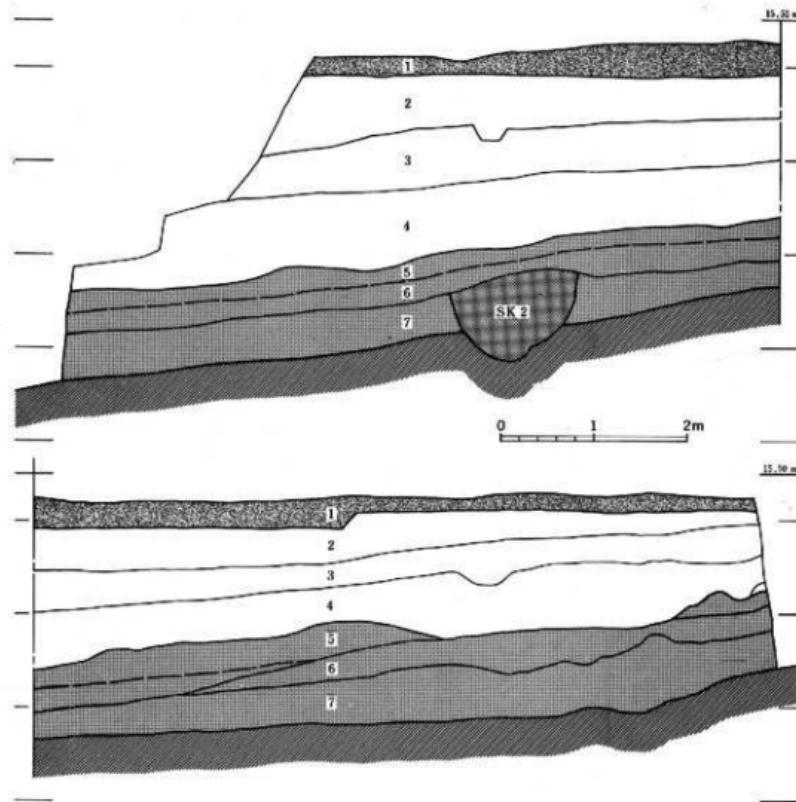
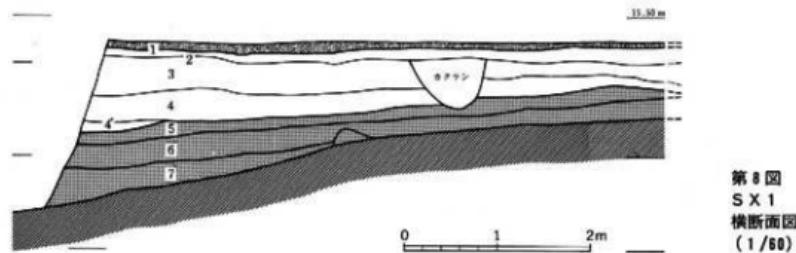


図6 図 連続図〔2〕(1/200)





第7図 SX 1縦断面図 (1/50)



第8図
SX 1
横断面図
(1/50)

3. 埋没谷

S X 1 (第7・8図、図版5-2, 6, 8)

埋没谷である。当遺跡が位置する台地を侵食する谷の小支谷の一つであったと考えられる。台地中央、北西方向より南東方向へ向って開口していた谷である。当調査地区内で谷部が終っていたので、谷頭部を検出したことになる。埋没谷の西側が工事のために大きく掘削を受けていること、南側トレンチの調査が不調に終わったことにより、埋没谷の性格や規模等判明したことは僅かであった。

土層観察のためのセクション帯を第4図に示したように3箇所設定した。①S.P.Aと明示。第7図、図版6-1・2、7-1で縦断面として示した。②S.P.Bとして明示。第8図、図版7-2で横断面として示した。③S.P.Cとして明示。図示していない。これらのセクションを観察し検討の結果、層位は以下のように理解された。

第1層；最上層の盛り土である。第2層との間には鉛錆が敷きつめられ整地されていた。この層より下方へ向って、建物の基礎コンクリートや排水管が穿たれていた。戦後の盛り土・整地層である。

第2層；灰褐色土、近代の盛り土

第3層；灰褐色土、近代の盛り土

第4層；灰褐色土、近代の盛り土

第5層；暗褐色土、奈良・平安時代の堆積土

第6層；黒褐色土、奈良・平安時代の堆積土

第7層；黒色土、奈良時代以前の堆積土

第2～4層は、類似した土層である。南側ではやや不明瞭であったが、明確に3区分できるものであった。縦断面の観察では、厚さ85～220cmを計る。多量の遺物を含む層である。第5～7層は、ほぼ黒褐色を呈する粘質土で、自然の堆積土と考えた。出土遺物より、平安時代末以前に形成された土層と判断される。第7層は出土遺物が完めて僅少であるが、土師器の細片のみで須恵器の出土が確認されることより、古墳時代前期に遡る可能性がある。なお、数点確認している古式土師器（その一部は図版12-001～003に示した）は、この土層に対応するものとしてよいのかもしれない。第5・6層出土の遺物も僅少である。第5～7層は縦断面の観察において、厚さ75～110cmを計る。当谷は、縦断面最南（東）部において、現地表下約4mを計る。谷頭の形態は舟底状と称してもよからう。南側トレンチは、第5層以下を振り下げるることはほとんどできなかった。第2～4層での出土遺物は多量で、今回出土遺物の7～8割に達するものである。遺物は北西方向の先端部より、この南側トレンチをはじめ、開口方向の南東側でより多く出土した。

V 遺 物

1. 土 器

土師器、須恵器、灰釉器、綠釉陶器、白磁及び中世陶器である。奈良時代及び平安時代前半、後半では7世紀後葉から10世紀代と考える土器がほとんどを占める。以下特に断わらない限り土器についてはこの時代のものを示す。7世紀前半以前と考えるもの及び10世紀後半以後を考えるものを図面12に示した。先にこれらについて若干述べておく。

001~003; 古式土師器、いわゆる月影式とされている甕の口縁部片である。

004・005; 6世紀代の須恵器杯身である。

135~140; 10世紀後半ないし10世紀末以降と考えられる土師器。高脚付小皿の135・136、台状底部を有する杯の137・138、小皿の139・140である。

601; 珠洲の甕口縁部片である。

602; 越前の播鉢で16世紀後半ごろのものである。

以下、奈良・平安時代の土器について若干見て行く。灰釉陶器・綠釉陶器・白磁については、宇野隆大氏、前川要氏より御教示いただいたので、この点を踏まえて記述することにする。

土師器（図面1・2、図版8）

供膳形態の杯・椀類は、成形技法よりロクロ使用のものと未使用のものとに2区分される。後者は出土数量が少なく図示もしていない。以下、前者のものについて述べる。これらの土師器は器表面処理の仕様によって、いくつかのものに分類される。①器表面に特別の処理を伴わない一般的な土師器、②赤彩土師器、内外面全体に赤彩を施すもの。③黒色赤彩土師器、内面を黒色化し外面に赤彩を施すもの。④黒色土師器、内面に黒色処理を施すいわゆる内黒土器である。このように4つに分類される。②とした赤彩土師器が圧倒的に多く、7~8割ほどを占めるものと判断される。器表面の剥離や磨滅と言った不安な要素があるが、残存状態がよいものを参考として、赤彩が一部分のみにしか残存していないものも全面にわたり赤彩が施されているものと考えた。

杯・椀 A類—高台が付かず、器高が深く椀形の杯（101~121）。B類—脚部が付き高杯の形態になると考えられるもの（122）。C類—高台が付き、高台付杯ないし椀と称すべきもの（123~127）。このように分類される。A類は、糸切りされた平底の底部より、口縁・体部は内窪して外上方へ拡がる形態を示す。異質な115以外、すべて全面赤彩された土師器である。この115を除いて法量より、大・小の2つに細分される。A I類一口径10.8~12.6、器高3.5~4.3、底径3.8~6.8cmを計る。101~114の14点である。A II類一口径15.0~16.6、器高5.1~6.0、底径5.0~6.6cmを計る。116~121の6点である。赤彩されていない115は、胎土も他のものと違ひ硬質な製品である。底部に糸切り痕を止める。B類とした高杯122は、内面がヘラ磨きされた後、黒色処理が施されて

いる。C類も大・小の2つに細分される。C I類- 底部のみの破片のため不明確だが、口径・器高は通有の法量を示すものと考えられる。全面赤彩されている。調整手法は底部に糸切り痕を止めるものが基本だが、2次回転ナデによって痕跡程度にしか残っていないものもある。123~126の4点図示した。C II類一図示し得たのは127の1点のみであるが、口径20.6cmを計る大型の椀である。全面赤彩されている。

皿 平底の底部より、口縁・体部は外上方へ直線的に延び、大きく開く。口端部はいくぶん肥厚し外反して終るものもある。128~130の3点で、口径11.8~12.6、器高1.5~2.4、底深3.7~5.8cmを計る。3点とも磨滅が甚だしく確認できないが、赤彩土師器の可能性が強い。

椀・鉢 大型の高台付柄ないし台付の鉢と分類され得るものである。131は、高台部が残存していないが、痕跡より高台付のものと考えた。口縁・体部は直線的に外上方へ延び、口径は32.4cmを計る。赤彩土師器である。132は、131より大きくなるものである。台付の鉢型を呈するが、台部は特殊なもので、全周せず、底部外端より逆梯形の台脚が下方へ向かって何箇所か付く形態となっている。この上器も磨滅が甚だしく確認できないが、赤彩土師器の可能性が強い。

煮沸形態の甕類は、数量的にも少なく良好な資料がない。133・134の2点のみ図示した。

須恵器（図面3~10、図版9~10）

供膳形態の杯・椀類は、底部の切り離し技法において、糸切り技法の上部器杯・椀類と対照的に、ヘラ切り技法が主体を占める。糸切り技法を有するものは僅かである。

杯 高台の付かないA類と高台が付くB類に大きく2区分される。A類は201~212の12点図示した。全体の形態が判明するものを細分してみる。A a類一比較的小型の杯の201・202。口径は9.4と9.7cmを計る。A b類一体下部が丸味を持ち、口縁部はやや外反して外上方へ拡がる杯。205・206で、口径は、12.6と12.2cmを計る。A c類一口縁・体部が直線的に外上方へ拡がる杯。210・211で、口径は、12.0と11.6cmを計る。A d類一口縁・体部が直線的に外上方へ開く杯。A a~c類のものと比べて器高が深い。212で、口径12.2cmを計る。すべて底部にヘラ切りの痕跡を止めしており、201・207・208・209の底部内面には仕上げナデが認められる。また、203の底部外面には、墨書「傳厨」が付く。206・207の底部外面には、ヘラ記号が付く。高台付杯であるB類については、232~235が異質があるので一応除外し、後で触れることにし、213~231の19点を当面の対象としよう。これらは法量より、B I類-219~231とB II類-213~218に細分される。B I類は口径が判明するものが、13.8cmを計る227と11.5cmを計る228の2点のみであるが、他のものもこの程度の口径を示すものと類推される。技法上では、底部外面にヘラ切り痕が付き、その後2次ナデが加えられているものがある。底部内面には、219・220等仕上げナデを施すものが多い。また、230の底部外縁・231の体下部には、ヘラ削りが施されている。なお、219の底部外面には、墨書「南？」が付く。B II類はB I類と比べて大型品である一群である。口径16.0~16.4cmを計る。底部外面にはヘラ切り痕が付く。216は例外的なもので、2次的にナデられた後、沈線文が廻る。これらのB I・B II類の杯に対し、232・233は器高が深く椀形になっている。全

体の形態が判明する232は、口径17.8・器高9.1・底径8.3cmを計る。口端部外面には一条の沈線が廻る。底部内面には仕上げナデが見られ、外面にはヘラ切り痕及びヘラ記号が認められる。234・235は底部外面に糸切り痕が付くものである。

椀 236は外面に稜が付き、椀ないし皿になると考えられる。237は器壁が厚い弧状の底部を有する。底部はヘラ削りを施している。椀としてよいであろう。

杯蓋 杯の中でも杯・椀類と組み合うもので、238～255の18点図示した。天井部中央が残存していない、つまみの有無を確認できないものが多いが、ほとんどのものが、宝珠形ないしそれが変化したボタン状のつまみが付くものと考えられる。天井部が平たい245・247は、つまみが付かない形態になり得る可能性がある。口縁部が欠損している255以外、口縁部の相違により5つに区分してみる。

a 類一口縁部内面にかえりが付くもの。238～240。

b 類一天井部より外下方へ延びてきた口縁部がそのまま終るもの。241。

c 類一口縁部が断面三角形状を呈し、僅かに下方へ曲るかのようにして終るもの。242～244。

b 類一口縁部は短かく下方へ屈曲して終るもの。245～251。

d 類一口縁部が内方へ巻き込む形を取り終るもの。252～254。

これらの蓋は、上記のa→d類の順で基本的に変化していくものと理解される。技法的には、ヘラ切りによって切り離しているものと判断される。245・246のように天井部内面に仕上げナデを施すものが多く認められる。

供膳形態以外の須恵器、すなわち貯蔵形態・厨形態とされる瓶・壺・甕類については、供膳形態のものと比べて大型品が多いこともあり、全体の形態が判明するものはほとんど存在しない。よって、器形ごとの分類を正確に行うことが困難であるが、以下、理解できた範囲で述べてみる。

壺蓋 256・257は短頸壺の蓋になるとえたものである。

小型壺 258は小型壺の口縁部になると考えられる。

長頸瓶 259～263。259は長頸瓶の頸部である。沈線が2条廻る。260～263は、長頸瓶の胴下底部になる可能性が強い。また、広口瓶や短頸壺のような形態になるかもしれない。

横瓶 264は横瓶の口縁部片である。

双耳瓶 265～274。266～268は双耳瓶の耳部である。269～274は突帯が付く胴部片である。双耳瓶の一部とみなしてよいであろう。265は胴下半・底部片である。双耳瓶になる可能性が強いと考えてここに入れておいた。

瓶・甕 275～279。各種の瓶類や甕類の口縁部になるものである。外反して大きく外上方へ拡がってきた口部に上下に肥厚する口端部が付く。

甕 280～287。口頭部が短く、甕の口縁部に当たるものを示す。

鉢 288・289。把付の平鉢である。288は、全体の形態が判明するもので、口径23.2、器高16.0、底径17.0cmを計る。

鍋 290・291。鍋の上部とえた290と鍋の把手部とえた291である。

甕・壺類部片 通有のあて具痕である同心円以外の特殊なあて具痕を、図面10に示した。放射状の292・293、車輪状の294・295、平行の296・297である。

灰釉陶器 (図面9、図版11-1・3・4)

椀・皿類の破片7点、瓶類の破片5点の合計12点図示した。椀・皿類は、口縁部片が301・302の2点、底部片が303~307の5点である。後者は三角形を呈する高台部が付く。303・304は底部外面をヘラ削りしている。305は糸切り痕の上に2次の回転ナデが見られる。307の底部内面は硯として再利用されている。瓶類は、308が広口瓶。309・310が長頸瓶、311・312が手付瓶ないし、大瓶と考えられる。

綠釉陶器 (図面11、図版11-2、12)

椀・皿類の破片16点図示した。ほぼ全体の形態が判明するもの1点(401)、口縁部片3点(402・403・416)、底部片12点(404~415)である。口縁部片の内、402は輪花椀であり、輪花が1点確認できる。底部片の内、414は体部外面に棱が付き、棱椀になるものである。高台部の違いにより、①蛇ノ目高台のもの、409~406の3点、②平高台のもの、407・408の2点、③輪高台のもの、409~415の7点となる。①と②は削り出し高台である。③は、409・410・413・414が付け高台となり、411・412・415が削り出し高台である。なお、401は付け高台である。これらのは生産地より、京都産、東海(猿投)産、近江産に区別し得ることを、宇野・前川氏より御教示を得たので、この区分ごとに若干様相を見てみる。

京都産 402・404~408・411・412・415・416の10点である。緑色・暗緑色の釉調を呈するものが中心である。404・415は黄緑色を呈する。胎土は堅緻であるが、404はいわゆる軟陶に属するものである。高台部は削り出し高台で、蛇ノ目、平、輪高台の3種類がある。405・406・411は底部外面の釉は、外縁に僅かに付くもので、中央部に施釉を行わないものである。なお、406は円板を貼り付けて高台部を作っており、外縁に糸切り痕が付く。

東海産 401・403・413・414の4点である。黄緑色の釉調を呈する。胎土は明灰色を呈する硬質なものである。401は体下部外面をヘラ削りしている。口径13.8cmを計る。414は底部外面に三又トチンの跡が付く。これらの製品については、猿投窯K90窯式の製品との御教示を得ている。

近江産 409・410の2点である。緑色の釉調を呈する。胎土は灰色を呈する硬質なものである。2点とも底部片であるが、高台部末端に段が見られる近江産独特のものとなっている。

白磁 (図面10、図版13-1)

中国産輸入白磁の口縁部片が2点出土した。501は直口線で口径13.8cmを計る。502は玉縁状口縁で口径12.6cmを計る。501が刑窯ないし定窯の10世紀代の製品、502が刑窯系で9世紀代の製品との御教示を得ている。

2. 瓦

軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している。県下の古瓦を扱った先行業績として、西井龍義氏の研究（西井1983）があるのでこれに依頼して若干観察してみる。なお、西井氏からは直接の御教示もいただいた。瓦の時期的区分として、形状・焼成等より白鳳期瓦と越中国分寺期瓦に2分されている。前者は御亭角焼寺所用瓦と考えているもので、御亭角式とされてきた8葉単弁蓮花文軒丸瓦や重弧文軒平瓦も含んでいる。後者は越中国分寺所用瓦とされているものが基本である。今回の出土瓦もこの両者のグループより成り立っているものである。名称については、現段階では時期を厳密に特定できないと考えて、御亭角系及び国分寺系と呼称することにする。

御亭角系とした瓦は、灰色を基調とし焼成が良好な製品である。国分寺系とした瓦は、灰褐色を基調とし焼成がやや不良な製品である。1点のみ出土した軒平瓦以外の種類ごとの点数は、図示したものを含めて次の通りである。御亭角系丸瓦7点、御亭角系平瓦21点、国分寺系丸瓦12点、国分寺系平瓦49点。

軒平瓦（図面17、図版14-1）

御亭角系の軒平瓦701である。一応重弧文軒平瓦としておくが、一重弧文である。瓦当面には簾状圧痕が付き、瓦当厚3.6cmを計る。段腰型式で、段面は幅7.5cmを計り、4条の沈線が入る。平瓦部は、凹面が布目でヘラ削りをその上に施している。凸面にはA2叩きと思われるものが僅かに付く。

御亭角系丸瓦（図面13、図版14-2・3の左側）

3点図示した。すべて側縁を含む破片である。凹面には布目が付く。凸面は702・703が縦にヘラ削りするのに対し、704はナデている。

御亭角系平瓦（図面13・14、図版15）

9点図示した。凸面に叩き目を有する705～708の4点と叩き目を有さない709～713の5点に2例分される。前者はA1叩きの705・706、B1叩きの707、B2叩きの708である。後者の凸面には、ナデを中心とする709・710・712・713とヘラ削りを施す711がある。焼成は良好で、712は全体に自然釉が付着する。なお、陶硯の項で述べる転用硯810は、この御亭角系平瓦で凸面をナデるものと再利用したものである。

国分寺系丸瓦（図面15、図版14-2・3右側）

3点図示した。凹面に布目が付き、凸面をナデするものが基本である。ただし716は、凸面にヘラ削りが、凹面にナデが見られ、軒丸瓦の丸瓦部になる可能性がある。

国分寺系平瓦（図面15・16、図版16）

8点図示した。広端を含む破片717・718の2点、側縁を含む破片720～724の5点、中央部片719である。凹面は布目で糸切り痕が付く。凸面は縦目叩きで離れ砂が見られる。

3. 土製品

土器・瓦以外の土製品及び特殊なものをここで取り上げた。土鍤・獸脚・陶硯である。これ以外に、埴輪ないし竈の一部と考えられるものが数点出土している。小破片であることと磨滅しているので明確にできないでいる。

土鍤（図面17、図版17-1）

柱状の形態の土鍤である。801～804の4点図示した。これらは完形品ないしはそれに近いもので、他に類似した小破片が1点出土している。すべて土師質の製品で、法量は次のようになる。801；全長7.3、最大径4.9、孔径1.4cm。802；全長7.1、最大径3.5、孔径1.2cm。803；全長6.8、最大径4.3、孔径1.2～1.5cm。804；全長6.2、最大径4.1、孔径1.6cm。

獸脚（図面17、図版17-2）

805である。須恵器壺類の1部であるが、特殊なものであるのでここで取り上げた。

陶硯（図面18、図版18）

円面硯3点（806～808）、風字硯1点（809）、転用硯2点（810・811）の合計6点図示した。瓦を再利用した810以外、須恵質のものである。円面硯は、806・807と808とに区分される。前者は、陸部と海部との間に境が設けられていない。硯面は凸面になり、高く外上方へ延びる外堤へと続く。两者とも脚部は欠損していて不明である。外縁径は、806が15.0cm、807が12.6cmを計る。806において、方形の透し孔の上端が確認できる。808は、外縁径13.0cmを計る。円形の陸部の外縁には低い内堤が付き、その周囲には外堤を伴う海部が廻る。なお図示していないが、他に1点円面硯の脚端部になる可能性を持つ破片が出土している。風字硯の809は、外堤部も確認できる陸部の小破片である。暗灰色を呈する堅緻な胎土を有する製品である。外提高は2.0～2.2cmを計る。転用硯は810・811の2点で、2点ともよく研磨されているので図示した。810は、御亭角系の平瓦を再利用したもので、凹面を硯面としている。811は、須恵器高台付杯を再利用したもので、底部外面を硯面としている。

4. その他の遺物

既述の土器、瓦、土製品以外に以下のものが出土している。

鐵闇連遺物 線の羽口、鐵滓が出土している。前者については図版17-3に示した。後者については、鐵滓塊が20点ほど出土している。

砥石 砥石が1点出土している。

石斧 純文時代の分銅型の打製石斧が2点出土している。

IV 結 語

遺構

今回の調査地区は、台地の縁片部に位置することに加えて、埋没谷が確認され、元来平坦面が少ない場所であったことが判明した。この埋没谷以外に遺構として、土坑2基、溝2条を検出したが、攪乱に切り込まれていたりして、いずれも残存状態はよくなかった。SK1・2やSD2は、奈良～平安時代前半期に遡る可能性が強いが、性格は不明である。一方SD1は16世紀後半頃の越前の鑿鉢が出土していることから、この段階に比定したく考える。前者は多少とでも、奈良・平安時代の国府に関連付けて考えてみたい。また後者は、戦国時代の城郭との関連を考えねばならない。

多量の遺物が出土した埋没谷は、形成の時期の違いにより、土層を大きく3層に区分し得る。①現代の整地層、②近代の盛り土層、③古墳時代～奈良・平安時代の堆積層となる。③の段階においては、地形に沿ってある程度のレベルで土層が堆積したが、谷部としての形状を止めるものであった。その後②の段階における造成によって、谷が完全に埋つてしまい半坦地となったのである。戦後当地に事務所や住宅が継続的に存在した点や、①・②の土層の内容等より、②の造成は戦前のことと判断した。現代と違い、大型の土木機械の普及が著しく遅れていたことを考慮して、離れた場所からではなく、付近に存在した遺物包含層を利用したものと理解するに至った。以上のことより、埋没谷を中心に見られる近代の盛り土出土の遺物を当遺跡及び付近のものとしておく。

遺物

出土遺物は、溝及び埋没谷下層出土の僅少なもの以外、すべて2次堆積のものである。2次堆積とは言え、県下では資料の蓄積が少ない奈良・平安時代のものが中心であり、貴重な資料と言える。このような出土状態の遺物があるので、厳密な型式学的分析を隔て報告すべきであるが、今回は余裕がなく、主なる遺物の資料紹介的なものになってしまった。

出土土器はほとんど7世紀葉～10世紀代頃のものである。もちろん在地席と考えられる土師器・須恵器が中心である。土師器が圧倒的に多く、特に赤彩を施した杯・碗類が極めて多量に出土している。これらの杯・碗類は型式的変化に乏しく時期差を明示し得ないが、短い時期の所産ではなく、須恵器や搬入陶器の年代観より、8～10世紀ぐらいの時間幅を示すものと推定される。以上のことから、当地は8～10世紀頃に赤彩土師器の盛行したことになるが、これは当遺跡や当地付近の特殊現象ではなく、このような赤彩土師器の盛行する地域（少なくとも、旧郡・旧国単位）に当地が所属していたと考えられる。一方、上師器類が少ない点については、当地付近の特殊現象と言えるかもしれない。

搬入品であると伴に広域流通圈を示す。灰釉陶器、綠釉陶器、白磁は、県下の遺跡としては多

量の出土と言える。灰釉陶器は猿投産、東濃産の陶者がある。緑釉は京都産・猿投産・近江産の3者である。図示したものでは京都産が圧倒的に多いが、約20点出土したその他の破片を加えると、京都産、猿投産が各々相半ばし、これに近江産が少し加わっている。緑釉陶器は、井波町高瀬遺跡、入善町じょうべのま遺跡、大沢野町野沢遺跡について、県下で4例目となっている。白磁は2点のみであるが、9・10世紀のもので貴重な資料である。

土師器・須恵器が7世紀後葉、特に8世紀以降、10世紀ぐらいのものであること、灰釉陶器・緑釉陶器・白磁の多量出土、瓦や陶瓶の出土等の点より、当遺物の性格を勘案するに、越中国府と結び付けて理解するのが妥当と思われる。

遺跡

伏木台地における遺跡発掘調査は、昭和41年富山県教育委員会によるものが唯一のものと言つてよい。翌年に「越中国分寺とその周辺の遺跡調査報告書」としてまとめられたもので、第1次調査として国分寺跡を、第2次調査として国庁・国衙推定地を対象とするものであった。後者は字御亭角・字美野下地内で御亭角遺跡とされてきた所でもある。今回の調査地区も字美野下地内で、昭和41年の第2次調査地点に東接する位置である。美野下遺跡と称して調査を行ってきたが、国庁・国衙推定地ないし御亭角遺跡の一角を占める場所である。

伏木台地には多くの遺跡が存在する。とりわけ古墳時代～奈良・平安時代の遺跡は利日に値する。多くの古墳群が築造され、その終末期には早くも寺院（御亭角廃寺）の造立をみるのである。7世紀後葉以降の国府の成立、8世紀後半頃の国分寺造営と古代越中国の政治・文化の拠点として発展していく。さらに9世紀以降における国衙権力の強化に伴い、増々重要な地域としてその歴史的役割を担っていたであろうことは想像に難くない。越中一之宮の所在地、古代射水川河口の港津の背後地としての機能、時代が降ってからは要塞の地として城郭建設と、多彩な内容を持った遺跡地帯である。

国府は中心官衙施設である国庁・国衙のみで機能していたのではなく、付近に拡がる庶人住区等を通じて周囲と結び付き、近隣の国分寺・一之宮・港津・駅等と有機的に関連を持ち存立していたと理解されよう。すなわち、伏木台地及びその周辺が国府関連の遺跡地帯と言ってよく、また国府以前・以後の諸遺跡との歴史的繋がりも考慮しなければならない。以上の点より地理的・歴史的にこれら諸遺跡を包括し、今まで周知の諸遺跡を中心に、伏木台地は「伏木台地遺跡群」と呼び得る内容を持っていると理解したい。そして、当遺跡・当調査地区はその一部を構成するものとしてよいであろう。

参考文献

- 伊藤隆三 1981『富山県小矢部市平桜岡山3号古跡、小矢部市教育委員会
- 大村正之 1925「桜谷古墳群」『富山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第7号 富山県内務部
- 京田良志 1972「寺跡・経塚・磨崖仏・建物跡など」『富山県史 考古編』富山県
- 酒井重洋 1983『富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書』II 富山県教育委員会
- 富山県教育委員会 1967「越中國分寺とその周辺の遺跡調査報告書」富山県教育委員会
- 西井龍義 1983「御亭角遺跡出土の瓦について」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 橋本正他 1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』入善町教育委員会
- 藤田富士夫 1974『富山県立山古窯跡群』『考古学ジャーナル』No.97 ニューサイエンス社
- 藤田富士夫 1983『日本の古代遺跡13 富山』保育社
- 舟崎久雄 1974「富山県における須恵器の編年」『富山県歴史文化財調査報告書』III 富山県教育委員会
- 古岡英明 1960「勝興寺附近遺存の追跡について(前)(後)」『越中史壇』第19・20号 越中史壇会
- 古岡英明 1972「古墳時代」『富山県史 考古編』富山県
- 古岡英明 1983「伏木地内の古代瓦出土地と、その歴史的背景—御亭角遺跡を中心に—」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 古岡英明 1985「越中仏教の創始期について—御亭角発掘を中心として—」『富山史壇』第86・87合併号 越中史壇会
- 古岡英明 1983「奈良・平安時代の上器編年」「東大寺領横江庄遺跡」松任市教育委員会・石川考古研究会
- 和田一郎 1959『高岡市史』上巻 青林書院新社

調査参加者名簿

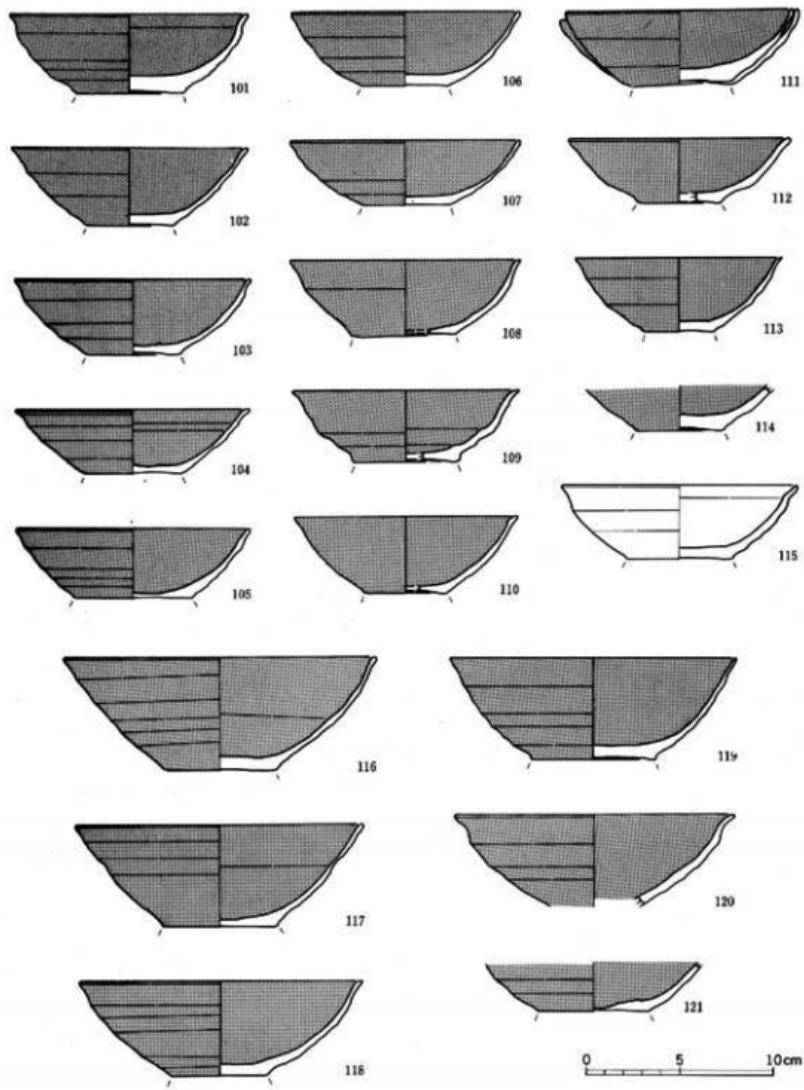
発掘

岡山智恵子、奥井忠枝、奥村きみ、奥村しで、奥村利雄、奥村久雄、川辺かづい、北ゆきい、上幸了、森野広義、坂田悦康、榎本正男、城光英子、高木のぶ、高橋すづか、田中政吉、山畠健二、鰐谷千代子、連沢昭了、羽廣てる子、船木悦子、吉本充宏、堀一子、福政雄、松井弘子、水せき、水貞子、宮下真知子、向直美、向はづ、向ふみ、向弓子、向リセ、森加代子、安しげ、矢田和子、山下節子、山崎美保子、山崎玲子

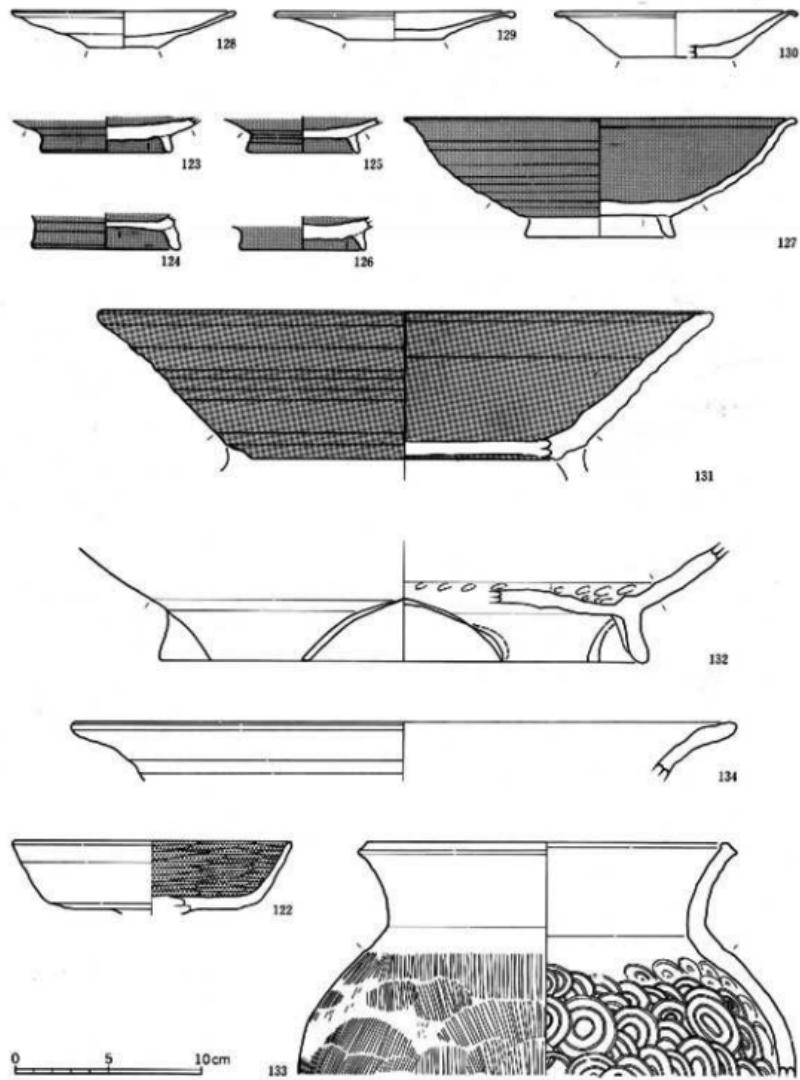
整理

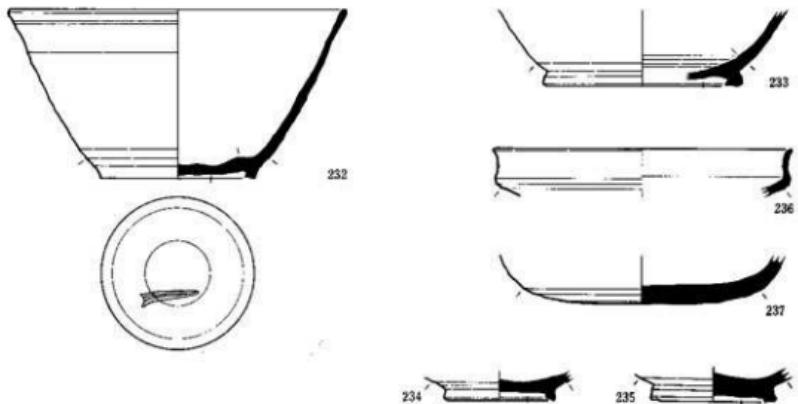
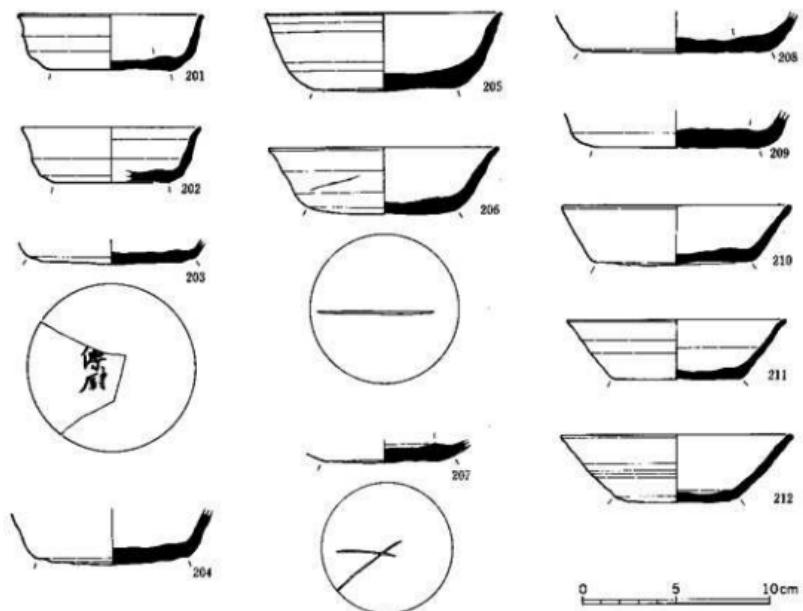
在沢利光、大竹豈、大野幸子、岡本淳一郎、沖光雄、小田木治太郎、笠間成美、北吉智恵子、坂井須美子、坂田悦康、沢辺利明、島崎光治、守護晴津子、関野敬子、田島高慈美、山畠健二、中尾昭代、中田聰美、永沢山紀乃、形川明美、沼田和代、波能咲了、針木憲子、船木悦子、宮下真知子、向弓子、山岸民子、山崎典子、山崎美保子、吉田正人

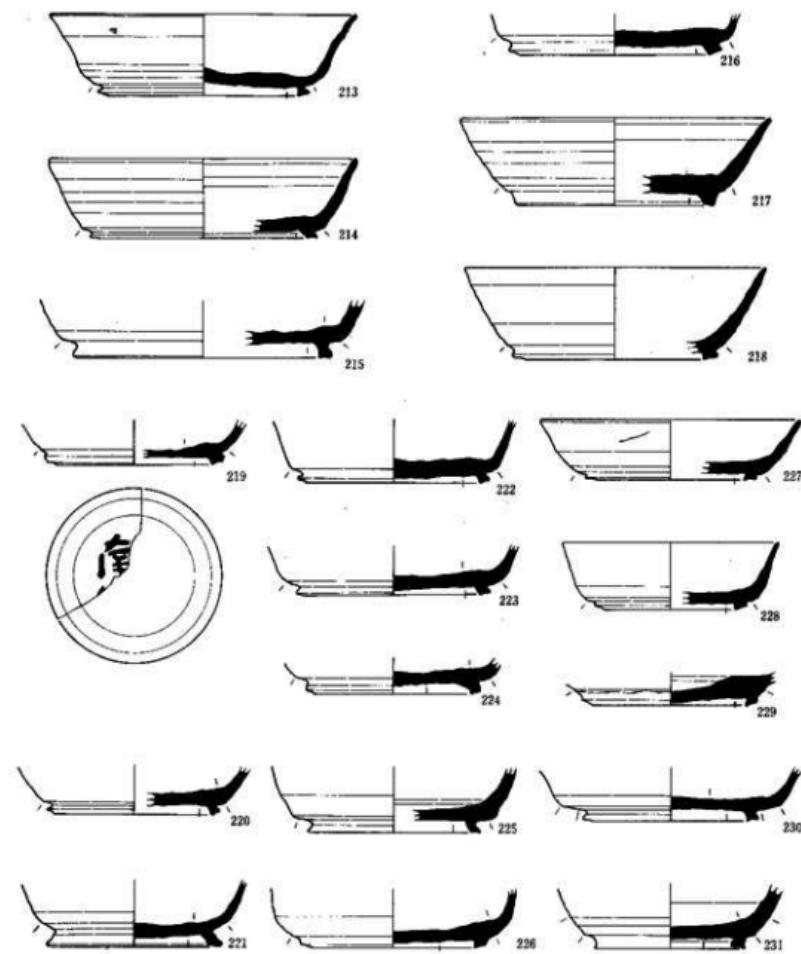
図面一
遺物実測図（土器）



図面二
遺物実測図（土器）

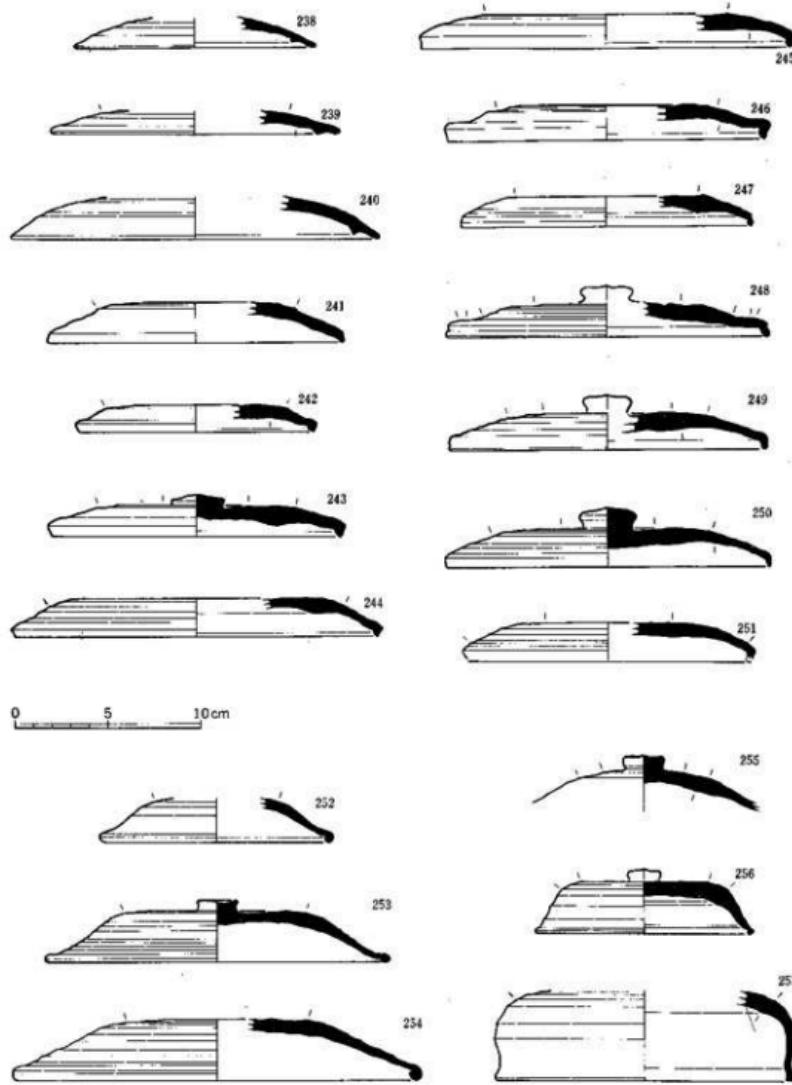




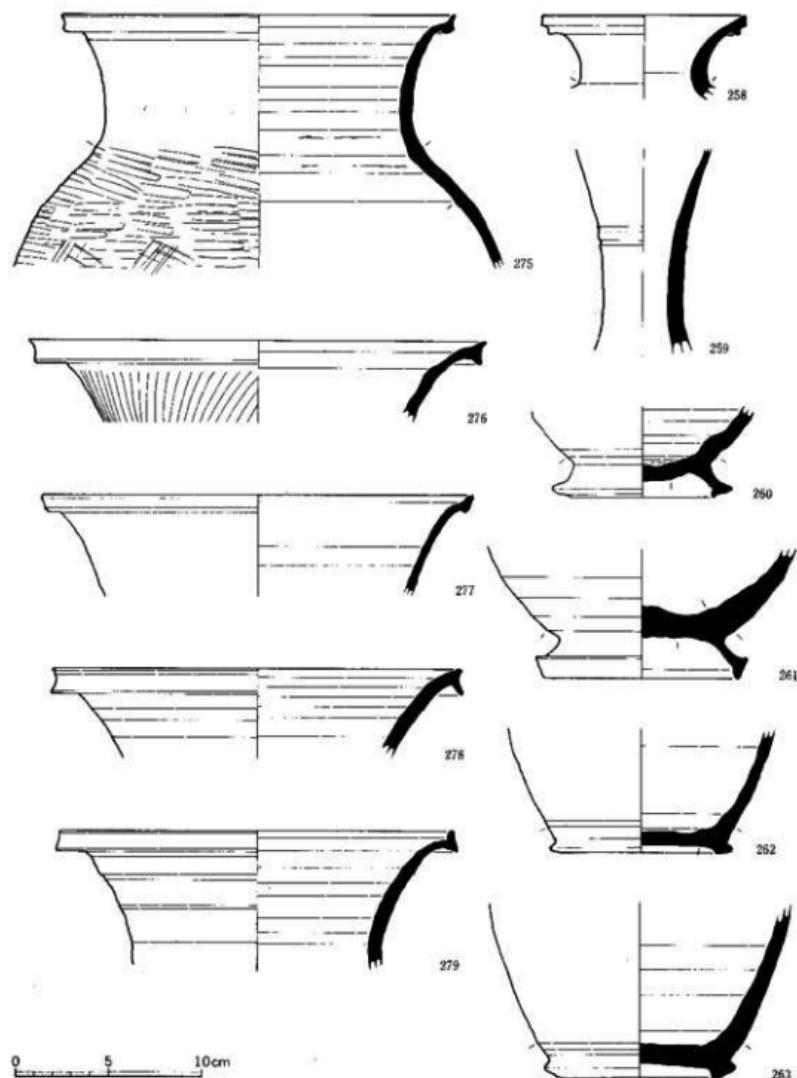


0 5 10 cm

図面五
遺物実測図
(土器)



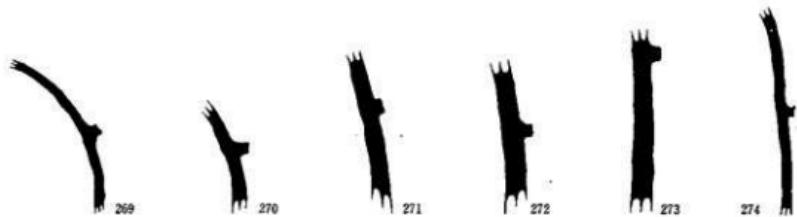
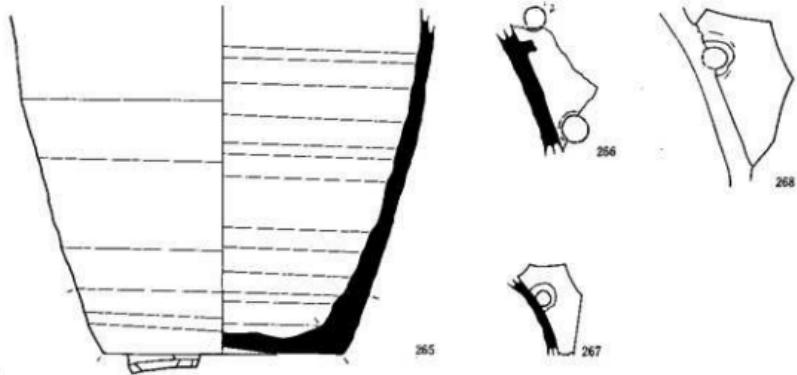
図面六 遺物実測図（土器部）

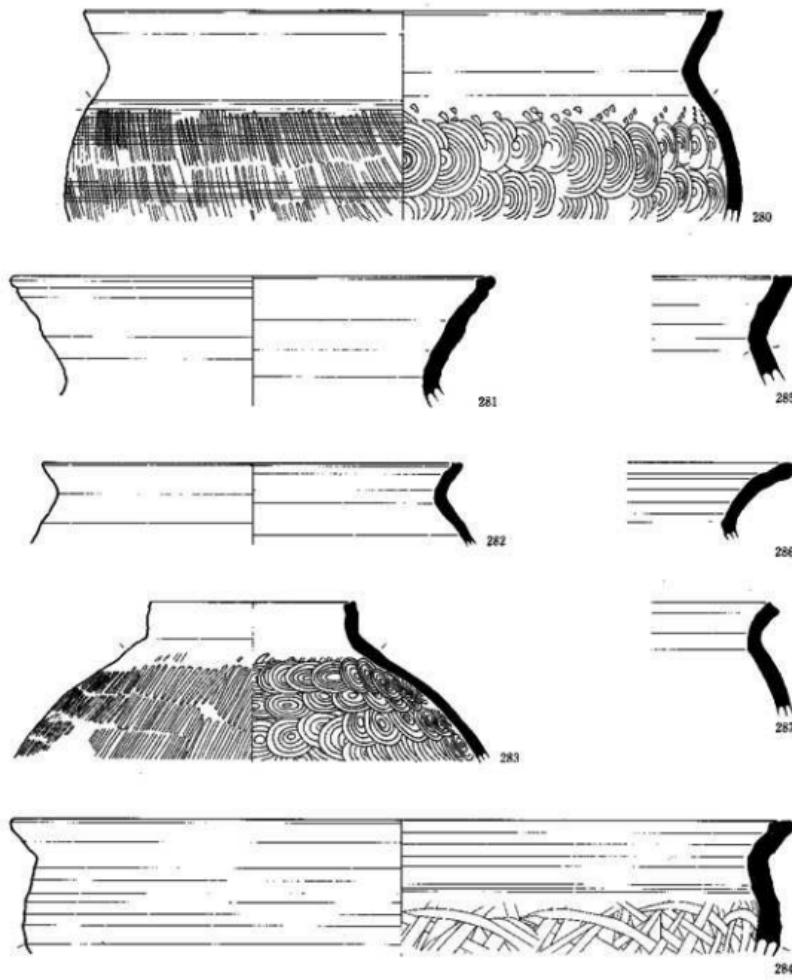


須恵器

縮尺1/3

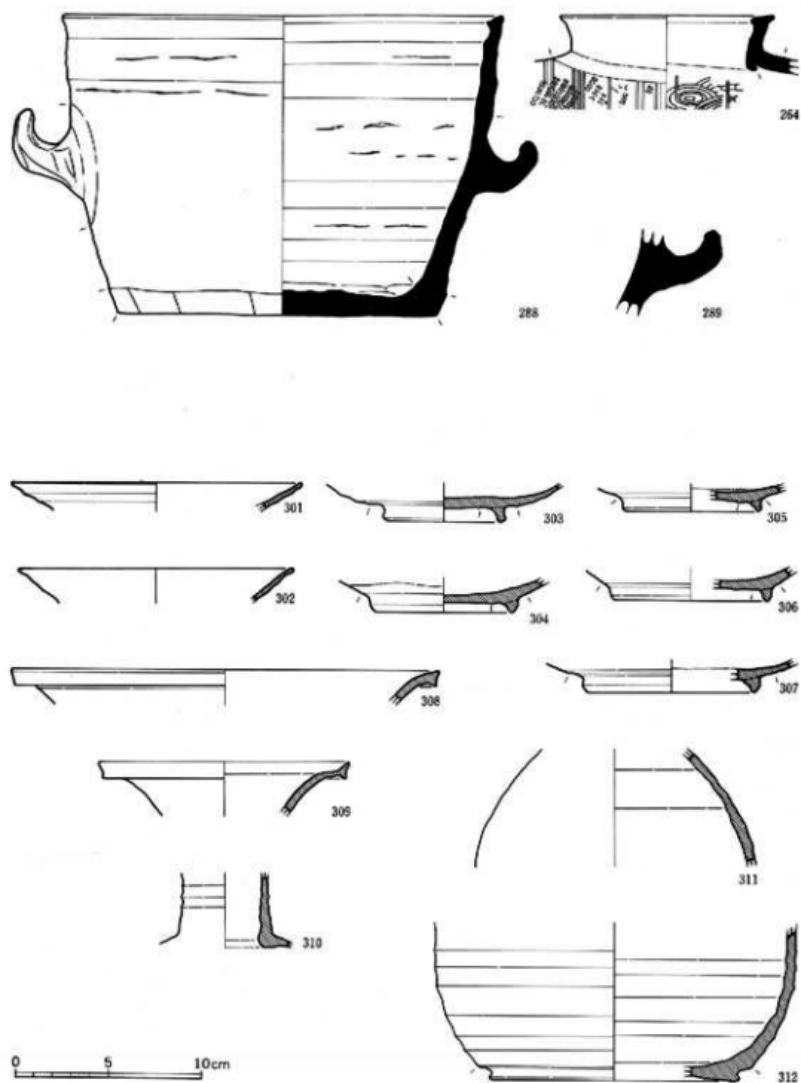
図面七 造物実測図（土器）





0 5 10 cm

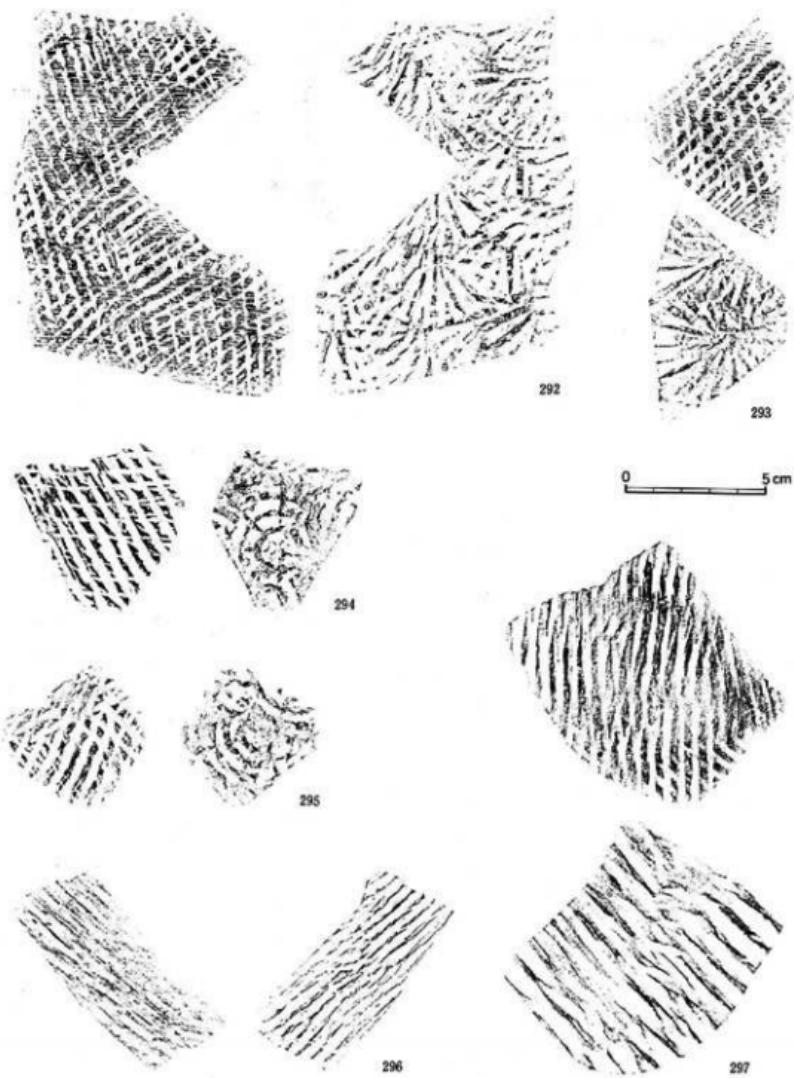
図面九 遺物実測図（土器）



須恵器；264・288・289、灰釉陶器；301～312

縮尺1/3

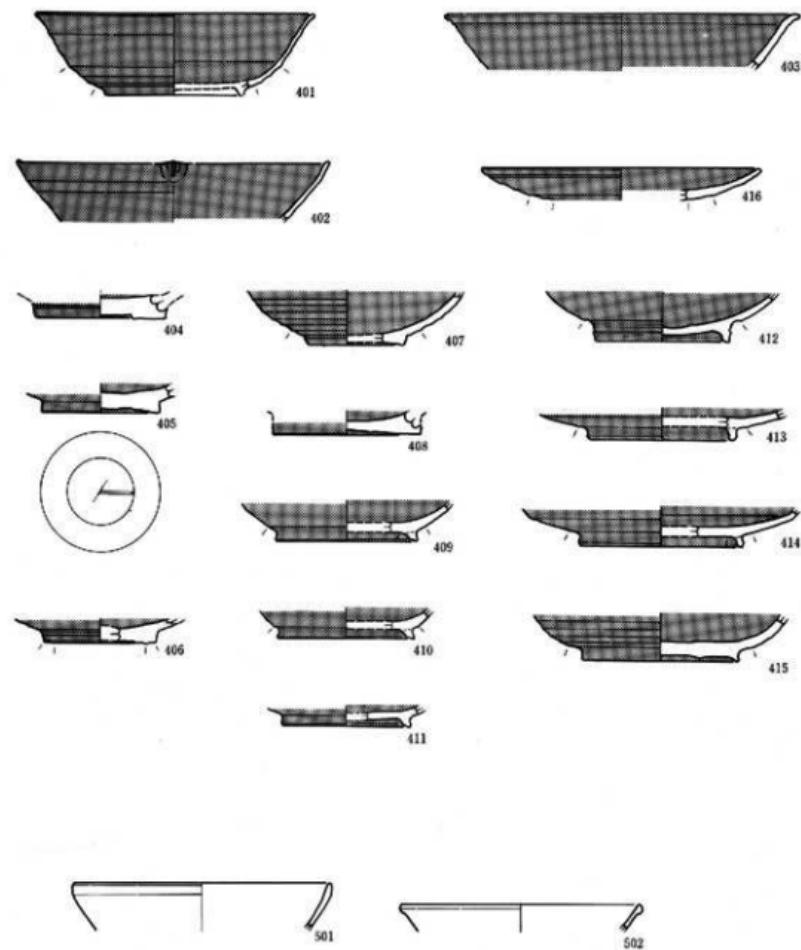
圖面一〇 遺物実測図（土器）



須恵器縹拓影

縮尺1/2

図面一
— 遺物実測図 (土器)

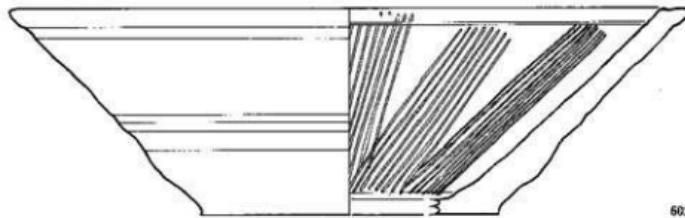
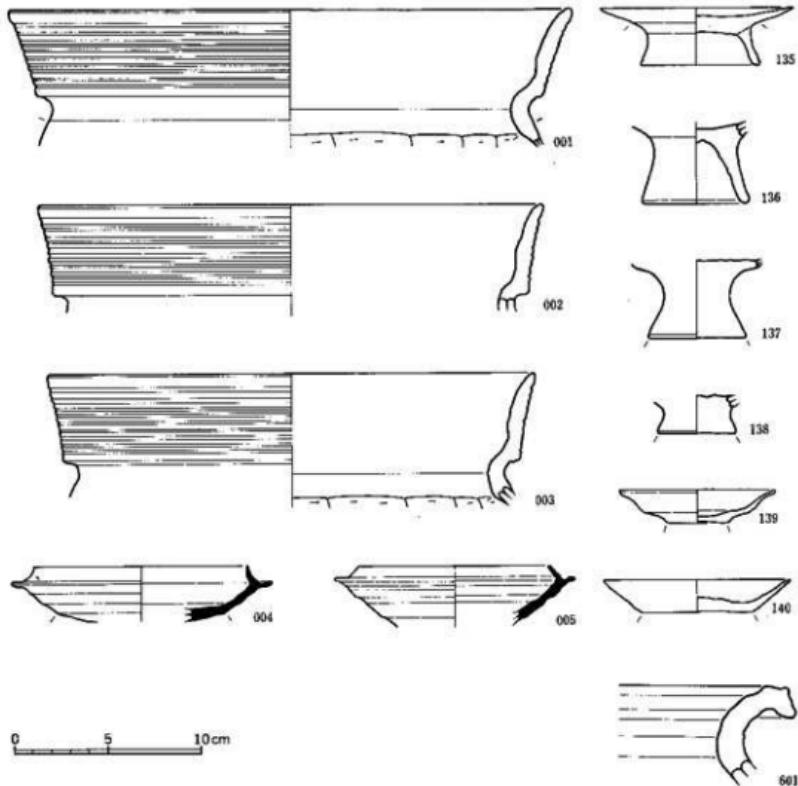


0 5 10cm

綠釉陶器；401～416、白磁；501・502

縮尺1/3

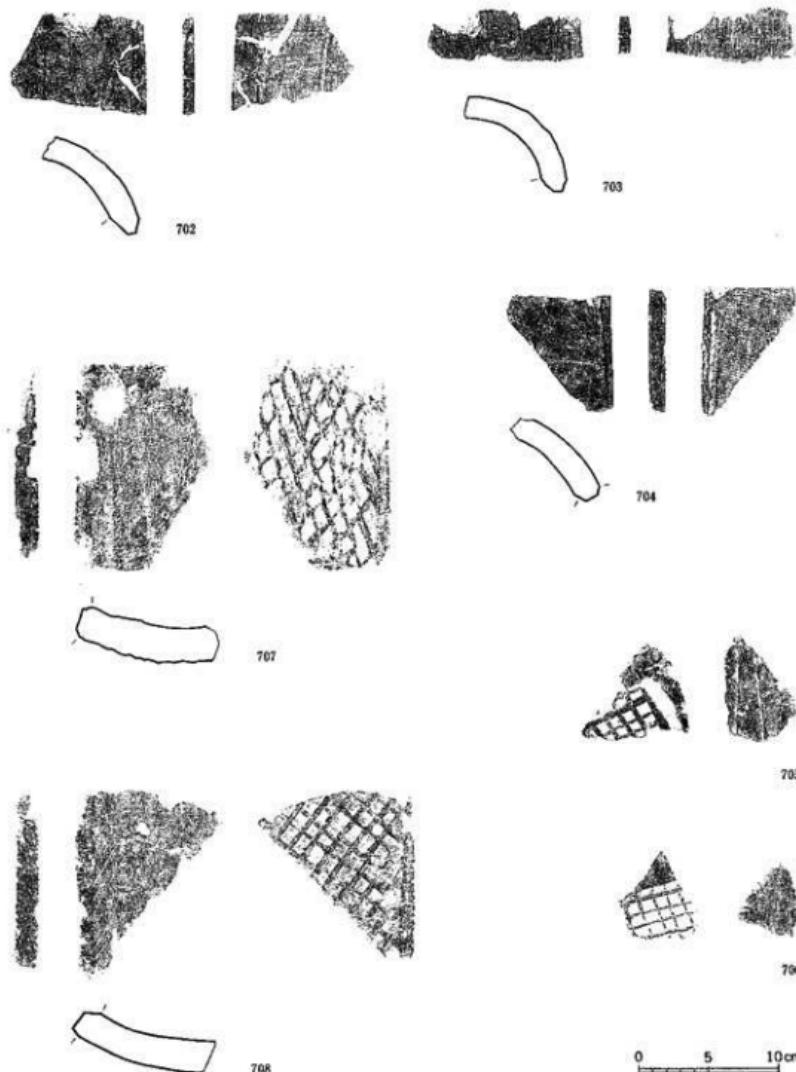
図面一二 遺物実測図（土器）



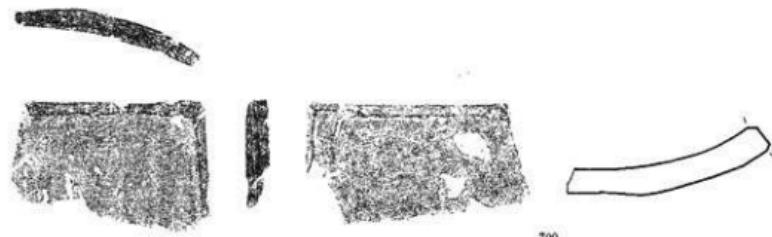
古式土師器；001～003、須恵器；004・005、土師器；135～140、珠洲；601、越前；602

縮尺1/3

圖面一三 遺物実測図(瓦)



圖一四
遺物実測図（瓦）



709



710



711

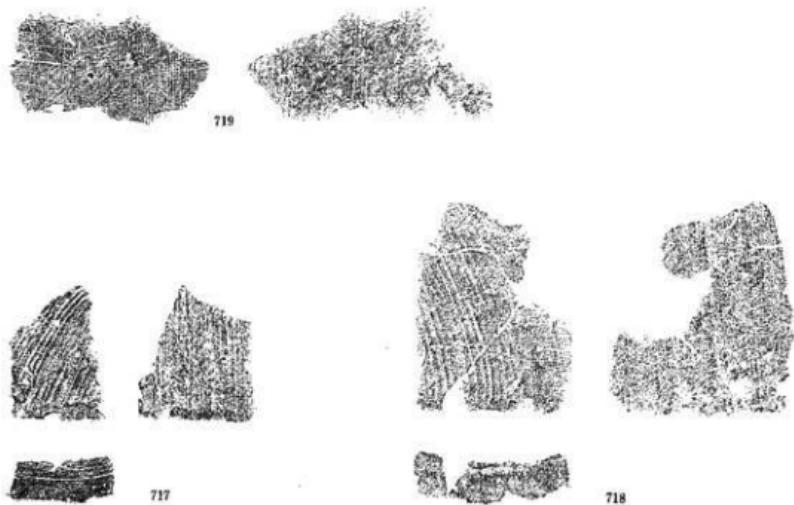
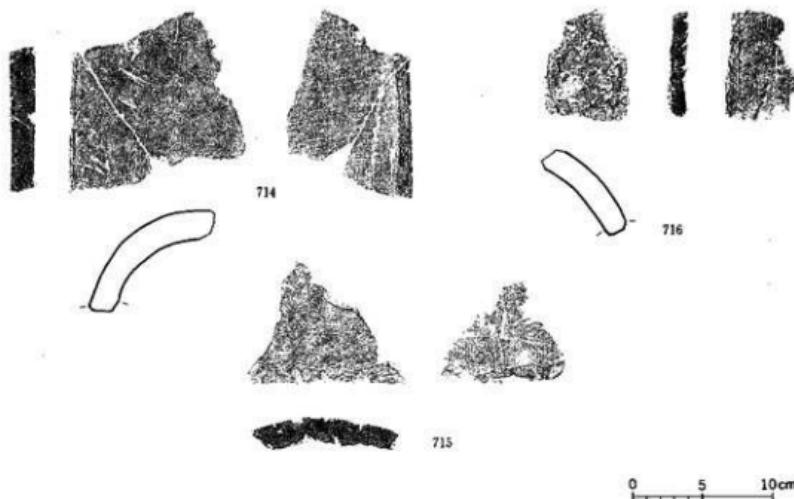
0 5 10cm



712

713

圖一五 遺物実測図（瓦）



圖面一六 遺物実測図(瓦)



720



721



722



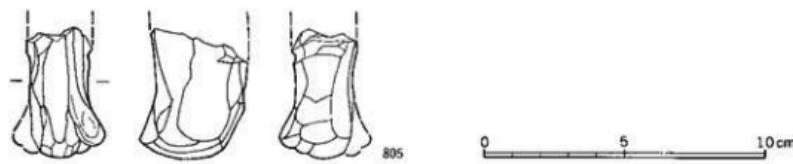
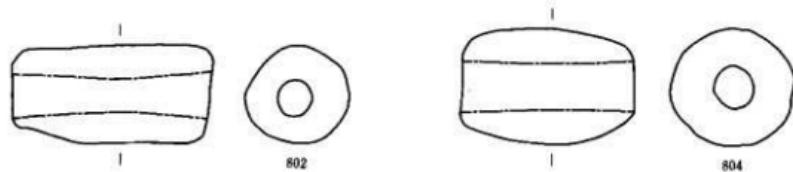
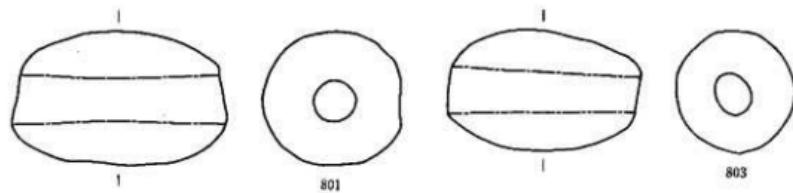
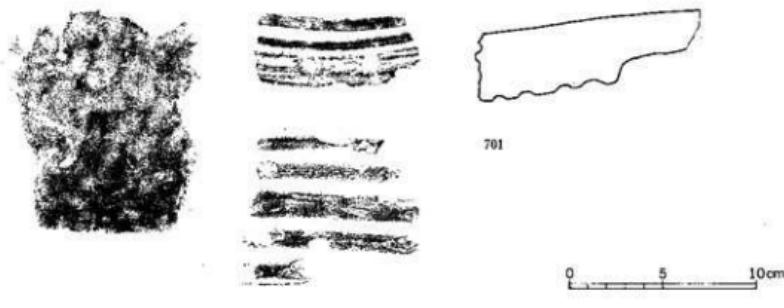
723



724

0 5 10cm

図面一七 遺物実測図（瓦・土製品）



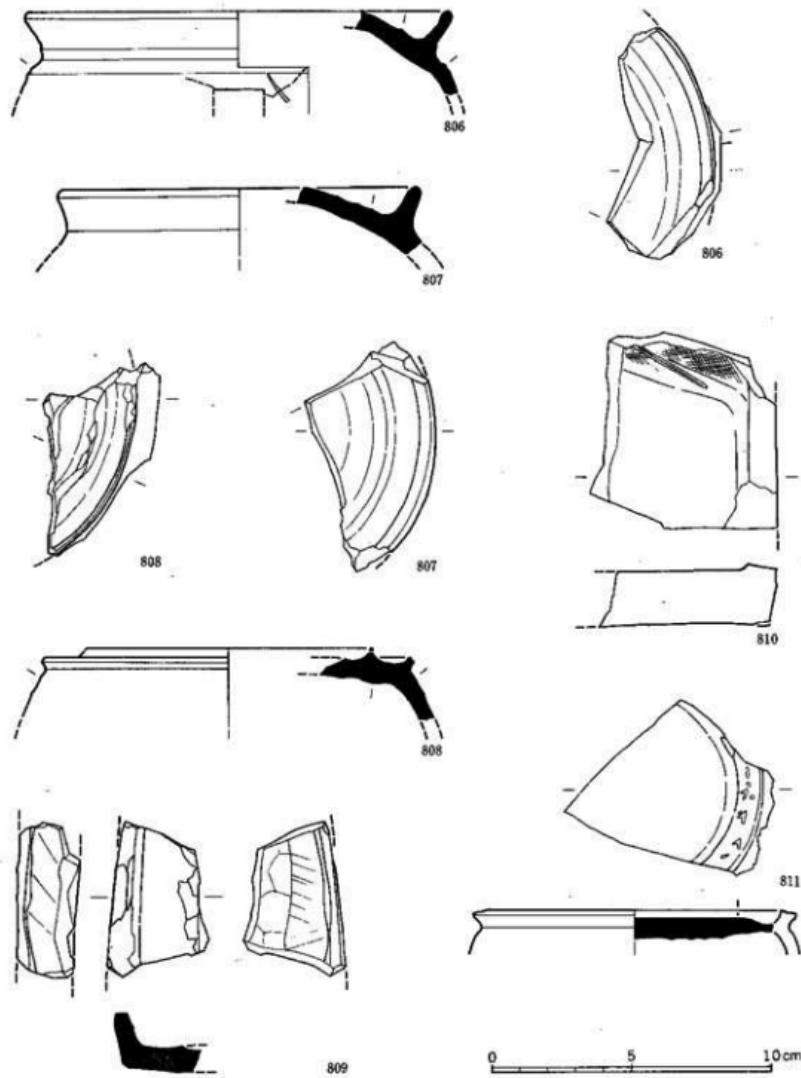
新平瓦；701

七鍤；801～804，歌脚；805

縮尺 $\frac{1}{2}$

縮尺 $\frac{1}{2}$

圖面一八 造物実測図（上製品）





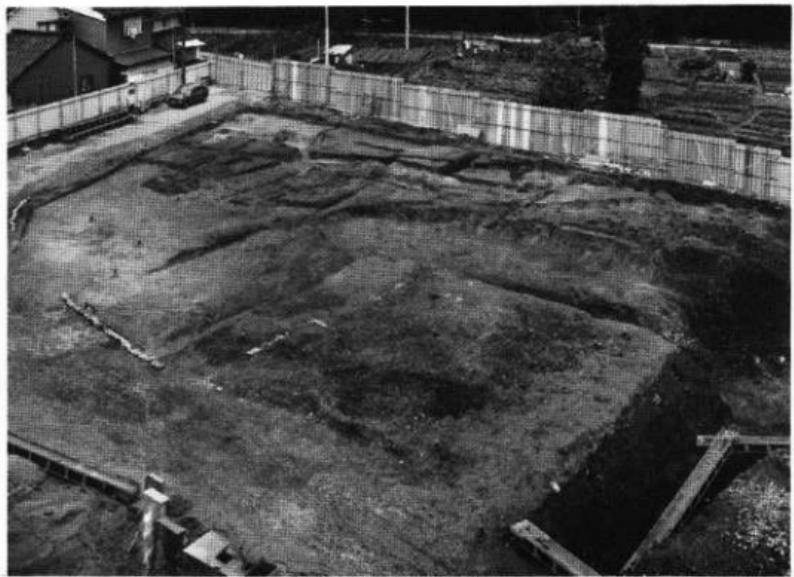
1. 遺跡遠景（東）



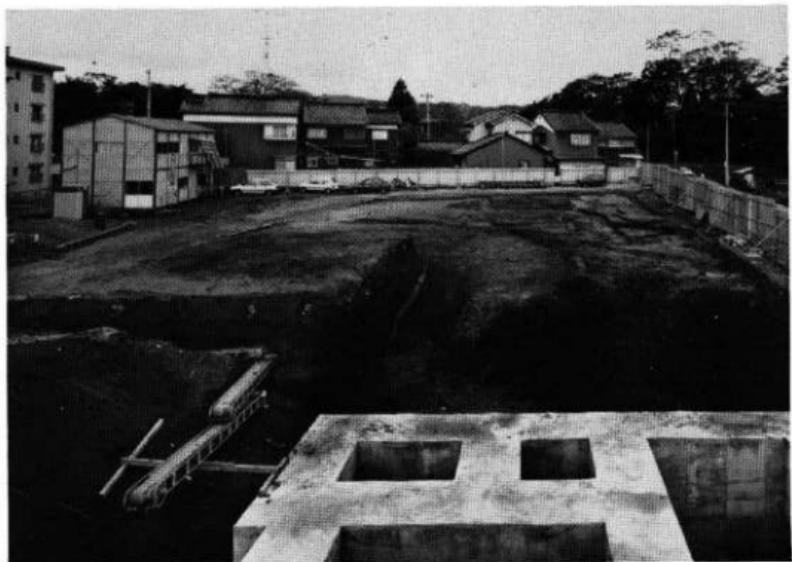
2. 調査地区全景（南）



1. 調査地区全景（南東）



2. 調査地区全景（南東）



1. 調査地区全景（東）



2. 調査地区全景（西）



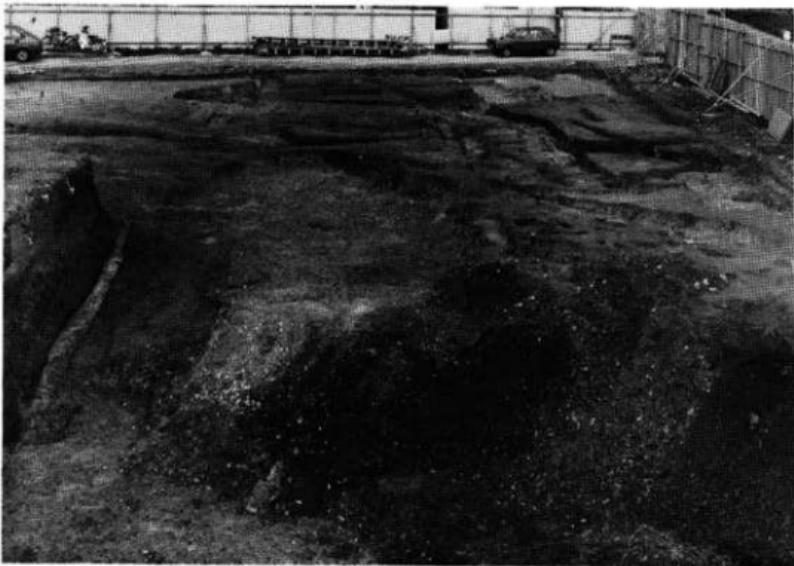
1. SD 1近景（西）



2. SD 2近景（西）



1. SD 3近景（南）



2. SX 1近景（東）



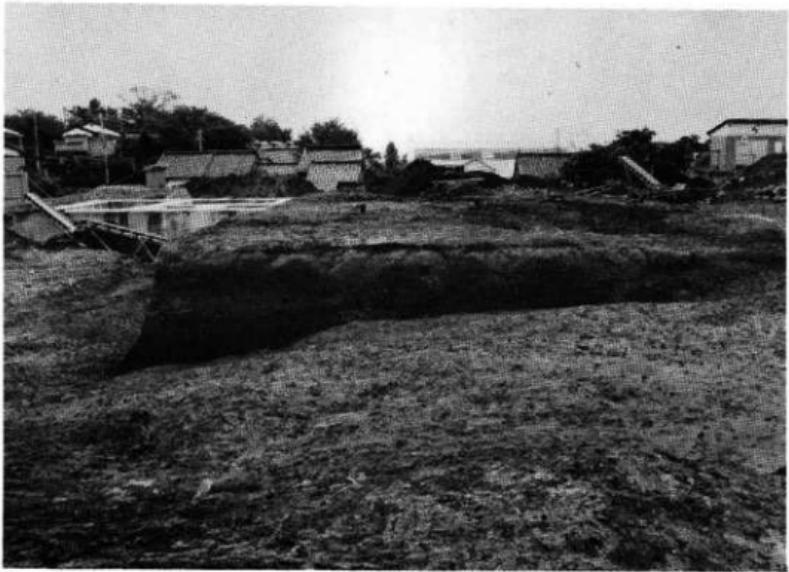
1. SX1綫断面〔1〕(北)



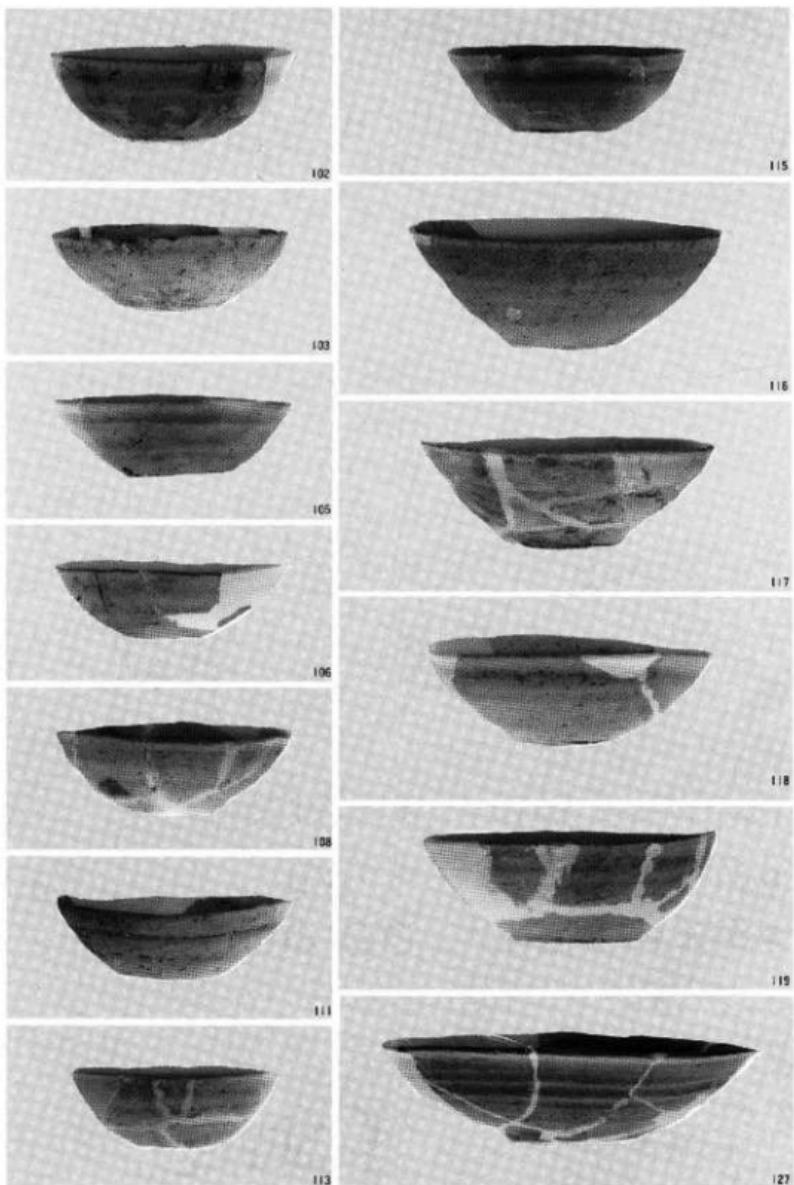
2. SX1綫断面〔2〕(北)



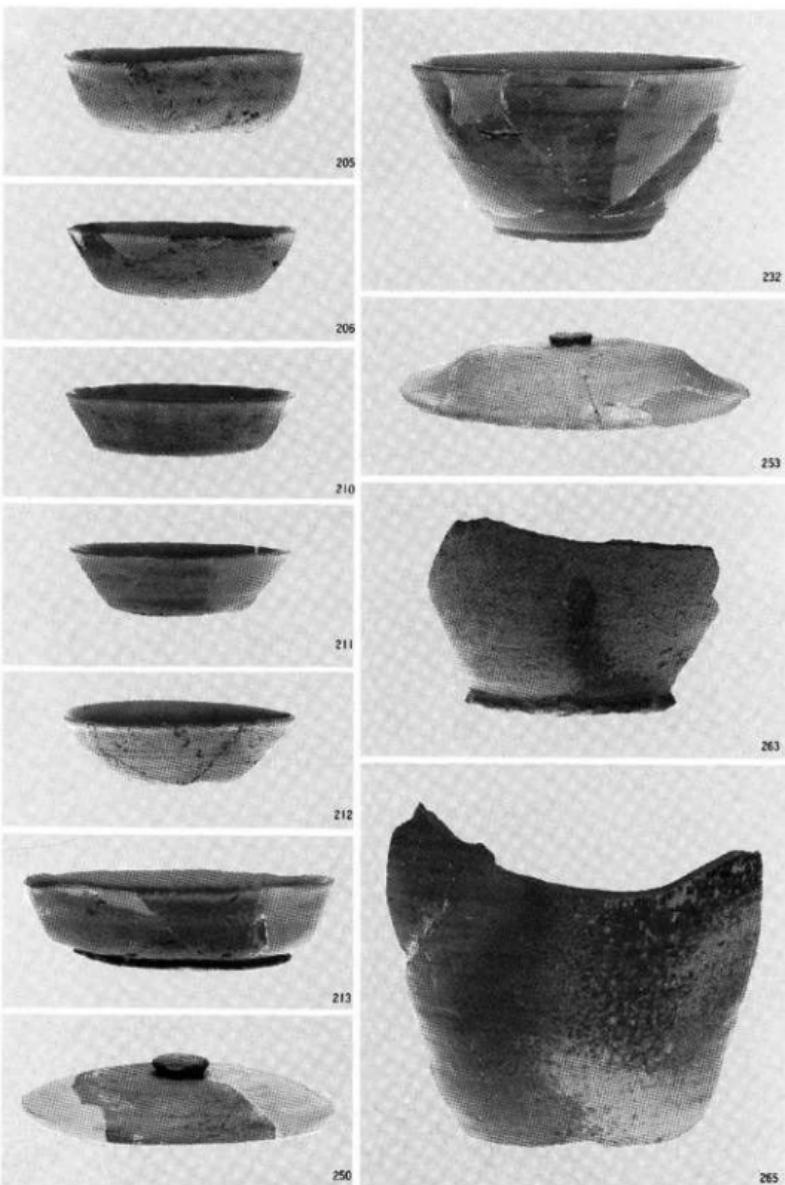
1. SX1 縦断面〔3〕（北）



2. SX1 横断面（西）

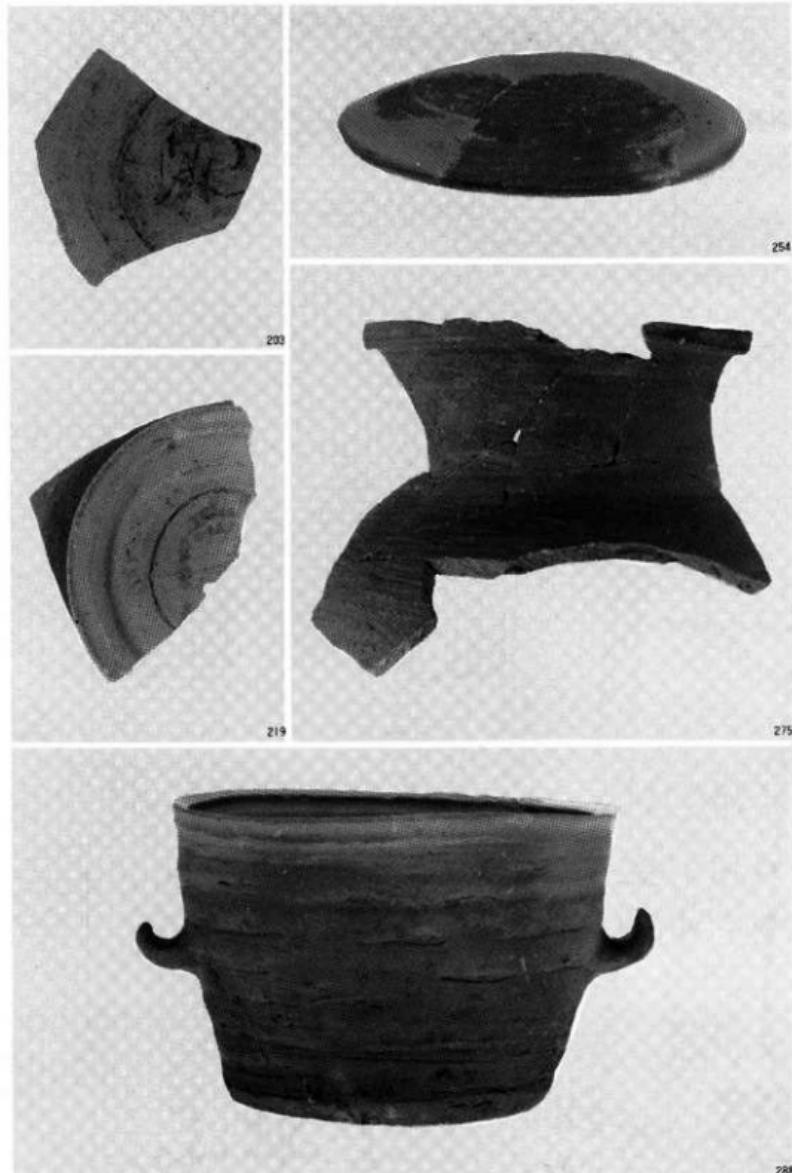


土器

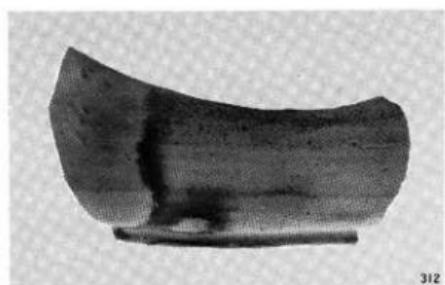


須恵器

圖版一〇 遺物（土器）



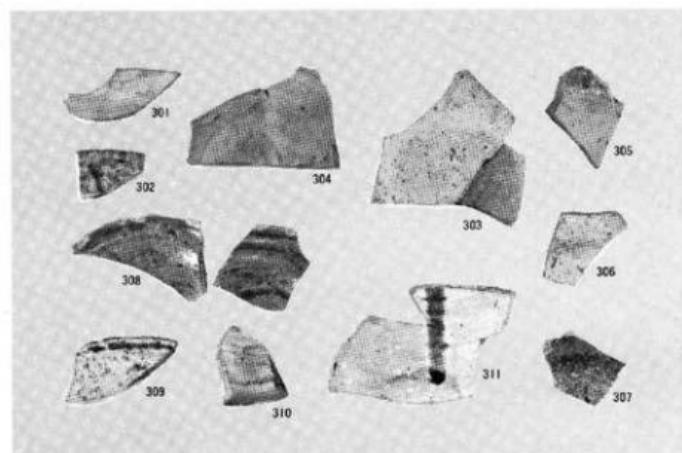
頹忠器



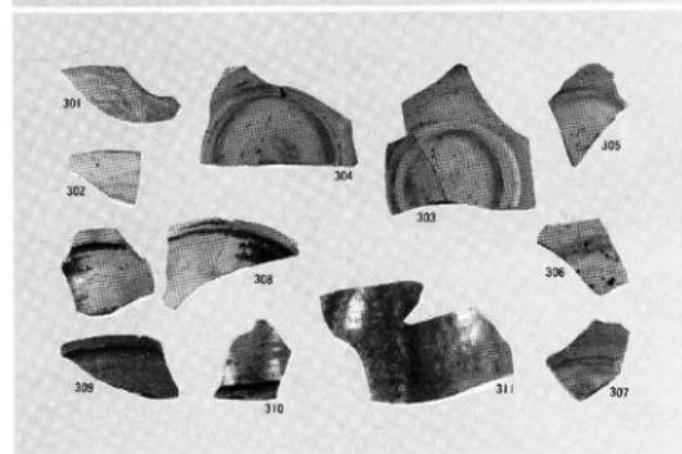
1. 灰釉陶器瓶



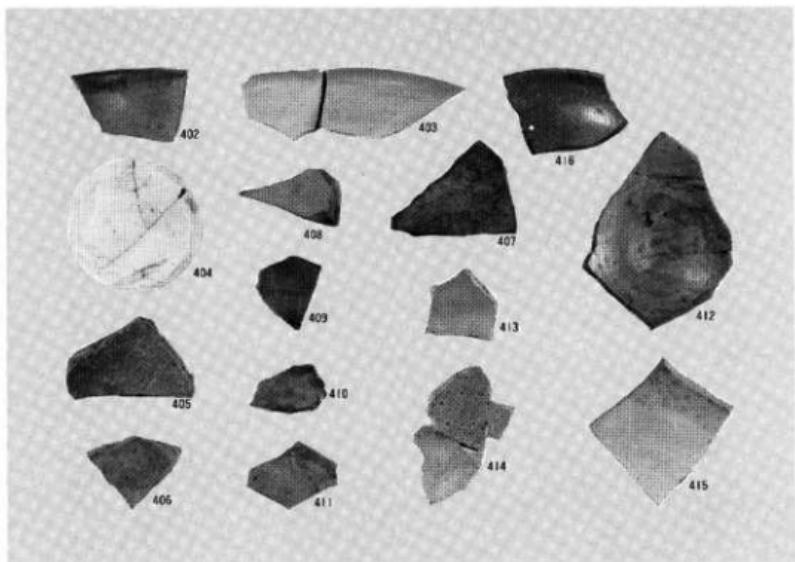
2. 綠釉陶器碗



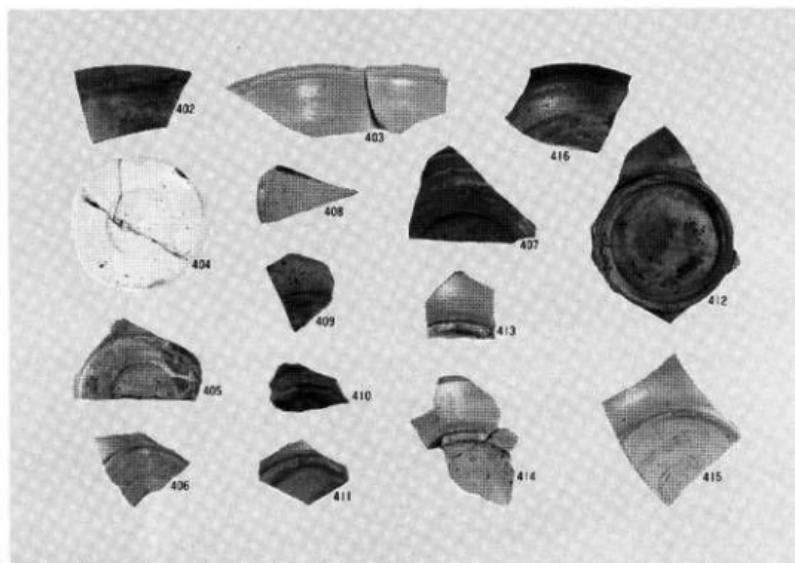
3. 灰釉
陶器・内面



4. 灰釉
陶器・外面

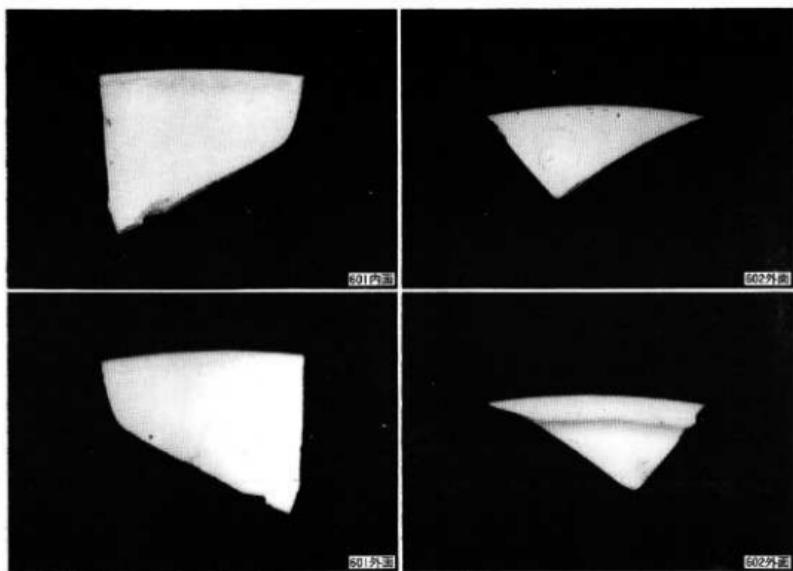


1. 緑釉陶器・内面



2. 緑釉陶器・外面

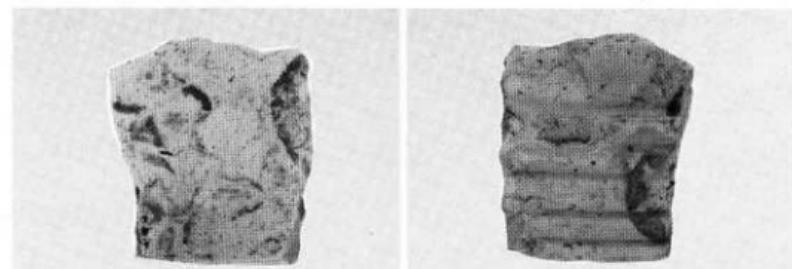
圖版一三 遺物（土器）



1. 白磁



2. 越前



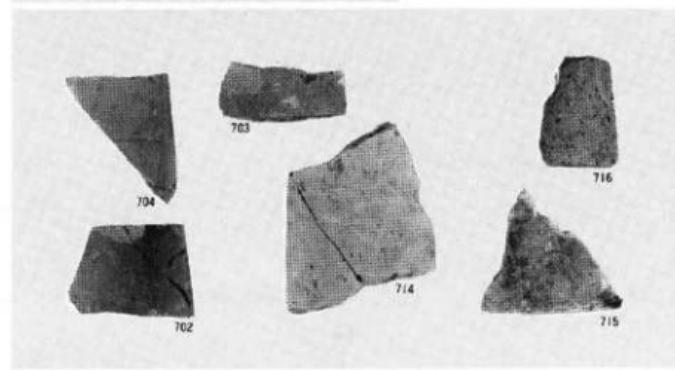
701凹面

701凸面

1. 斧平瓦



701瓦当



704

703

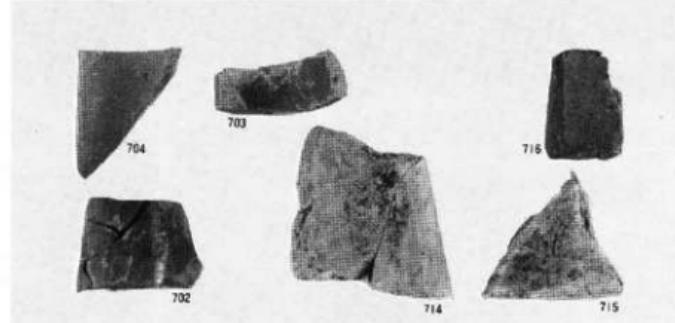
716

702

714

715

2. 丸瓦
·凸面



704

703

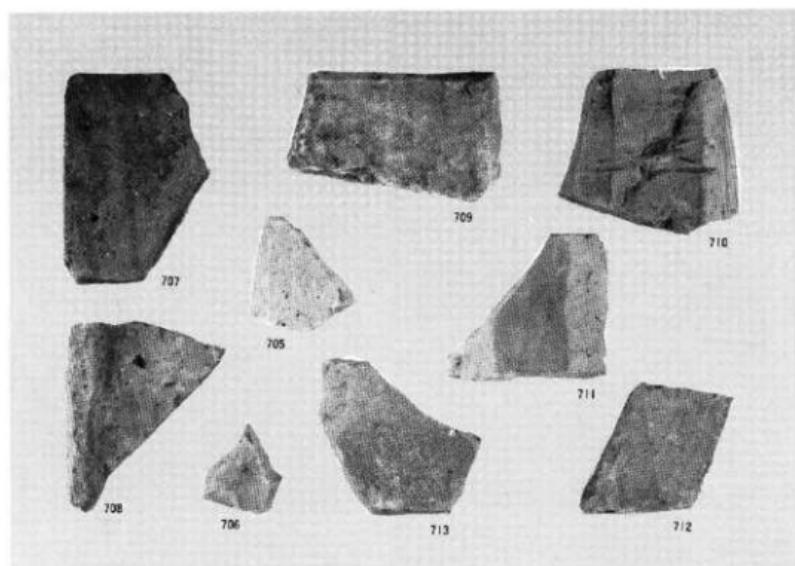
716

702

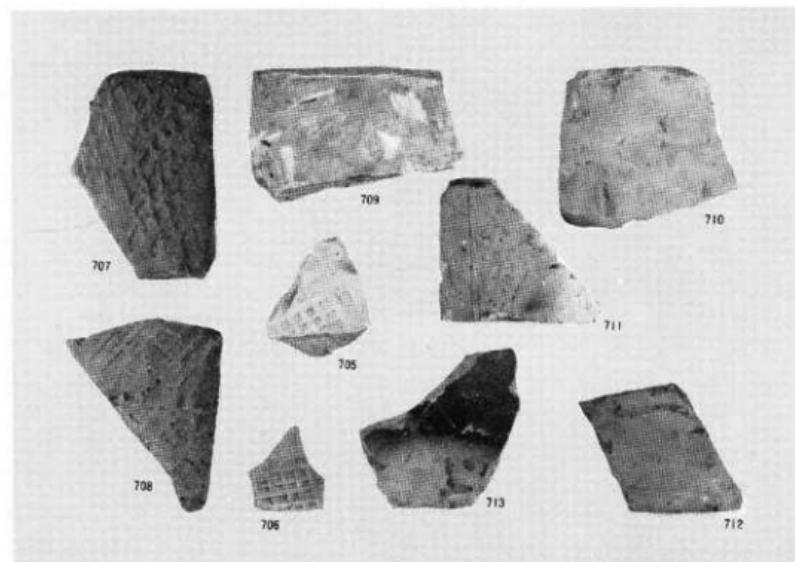
714

715

3. 丸瓦
·凹面

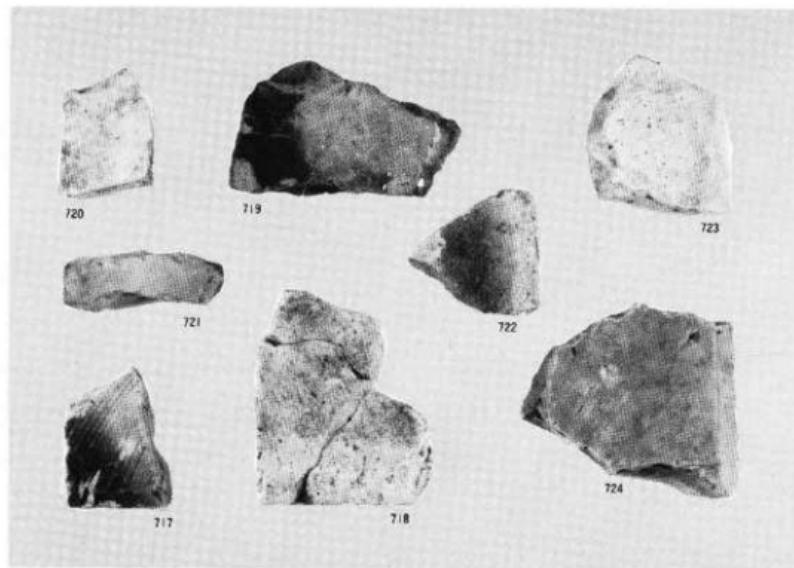


1. 御亭角系平瓦・凹面

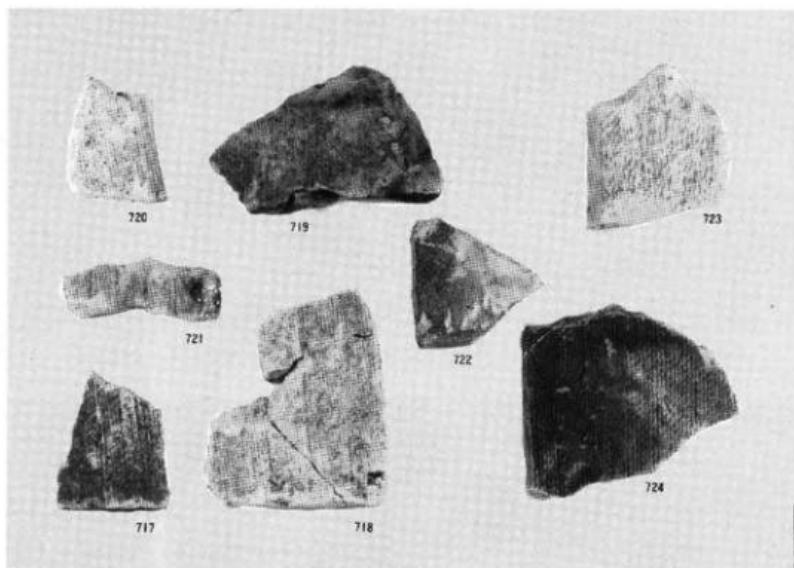


2. 御亭角系平瓦・凸面

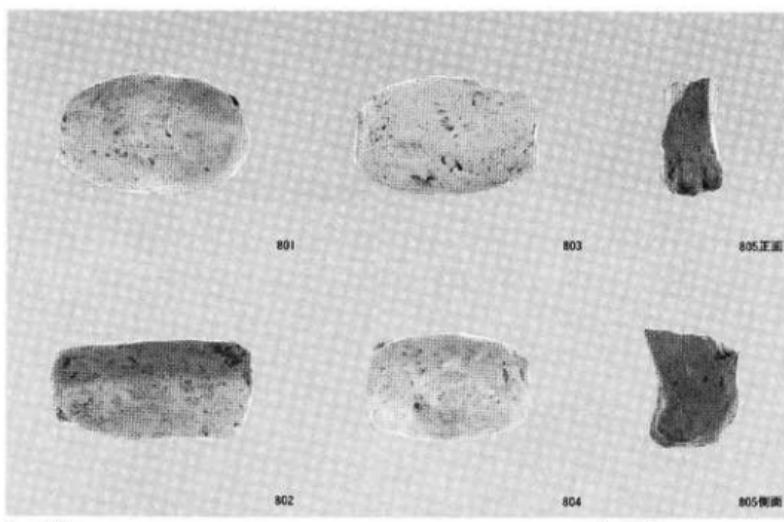
圖版一六 遺物（瓦）



1. 国分寺系平瓦・凹面

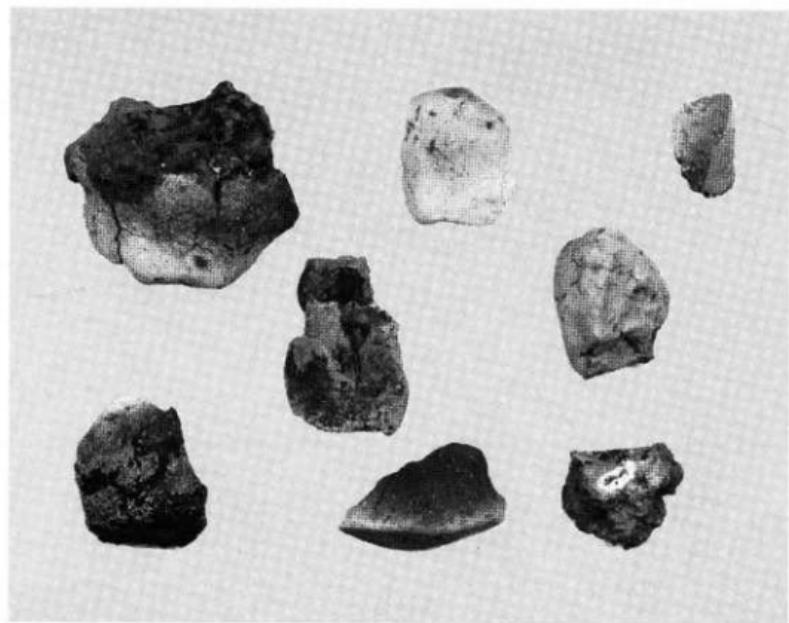


2. 国分寺系平瓦・凸面



1. 土鍤

2. 脚



3. 種の羽口

圖版一八 遺物（土製品）



806側面



807側面



808側面



806底面



810底面



807底面



810側面



809側面



809底面



811側面

陶硯

富山県高岡市

美野下遺跡調査概報

1986年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7-50

印刷者 小間印刷株式会社
富山県高岡市利原町3